

校異源氏物語・わかな下

ことはりとはおもへともうれたくもいへるかないてやなそかくことなる事なき
あへしらひ許をなくさめにてはいかゝすくさむかゝる人つてなれてひと事をも
のたまひきこゆる世ありなむやと思ふにつけてもおほかたにてはおしくめてた
しとおもひきこゆる院の御ためなまゆかむ心やそひにたらんつこりの日は人
ゝあまたまいり給へりなま物うくすゝろはしけれとそのあたりの花の色をもみ
てやなくさむとおもひてまいりたまふ殿上のゝりゆみきさらきとありしをすき
て三月はた御き月なれはくちおしくと人ゝ思ふにこの院にかゝるまとゐあるへ
しときゝつたへてれいのつとひたまふ左右大将さる御なからひにてまいりたま
へはすけたちなといとみかはしてこゆみとのたまひしかとかちゆみのすくれた
る上手ともありければめしいてゝいさせたまふ殿上人ともゝつき／＼しきかき
りはみなまへしりへの心こまとりの方わきてくれゆくまゝにけふにとちむるか
すみのけしきもあはたゝしくみたるゝゆふかせに花のかけいとゝたつことやす
からて人ゝいたくゑひすきたまひてえむなるかけものともこなたかなた人ゝの
御心みえぬへきをやなきのはをもゝたひいあてつへきとねりともものうけはりて
いとるむしんなりやすこしこゝしきてつきともをこそいとませめとて大将たち
よりはしめておりたまふに衛門督人よりけになかめをしつゝものしたまへはか
のかたはし心しれる御めにはみつつけゝなをいとけしきことなりわつらはしき
事いてくへき世にやあらむと我さへ思ひつきぬる心ちすこの君たち御中いとよ
しさるなからひとふなかにも心かはしてねんころなれはゝかなき事にて物
おもはしくうちまきゝることあらむをいとおしくおほえたまふ身つからもおと
ゝをみたてまつるにけおそろしくまはゆくかゝる心はあるへきものかなのめな
らむにてたにけしからす人にてむつかるへきふるまひはせしと思ものをまして
おほけなき事とおもひわひてはかのありしねこをたにえてしかな思事かたらふ
へくはあらねとかたはらさひしきなくさめにもなつけむとおもふにものくるお
しくいかてかはぬすみいてむとそれさへそかたき事なりける女御ゝ方にまいり
てものかたりなときこえまきらはし心みるいとおくふかく心はつかしき御もて
なしにてまほにみえたまふ事もなしかゝる御中らひにたにけとをくならひたる

をゆくりかにあやしくはありしわさそかしとはさすかにうちおほゆれとおほろけにしめたるわか心からあさくも思ひなされす春宮にまいり給てろなうかよひ給へる所あらむかしとめとゝめてみたてまつるにゝほひやかになとはあらぬ御かたちなれとさはかりの御ありさまはたいとことにてあてになまめかしとおはしますうちの御ねこのあまたひきつれたりけるはらからともの所ゝにあかれてこの宮にもまいれるかいとおかしけにてありくをみるにまつおもひいてらるれは六条の院のひめ宮の御方に侍ねこゝそいとみえぬやうなるかほしておかしう侍しかはつかになむみ給へしとけいしたまへはわさとらうたくせさせたまふ御心にてくはしくとはせ給からねこのこゝのにたかへるさましてなん侍りしおなしやうなる物なれと心おかしく人なれたるはあやしくなつかしき物になむ侍なとゆかしくおほさる許きこえなしたまふきこしめしをきてあのことくきりつほの御かたよりつたへてきこえさせ給ければまいらせたまへりけにいつくしけなるねこなりけりと人々けうするを衛門督はたつねんとおほしたりきと御けしきをみをきて日ころへてまいりたまへりわらはなりしより朱雀院のとりわきておほしつかはせ給しかは御山すみにをくれきこえては又この宮にもしたしうまいり心よせきこえたり御ことなどをしへきこえ給とて御ねこともあまたつとひ侍にけりいつらこのみし人はとたつねてみつけ給へりいとらうたくおほえてかきなてゝゐたり宮もけにおかしきさましたりけり心なんまたなつきかたきはみなれぬ人をするにやあらむこゝなるねこともことにをとらすかしとのたまへはこれはさるわきまへ心もおさく侍らぬものなれとその中にも心かしこきはをのつからたましひ侍らむかしなときこえてまさるともさふらふめるをこれはしはしたまはりあつからむと申給心の中にあなちにおこましくかつはおほゆるつゐにこれをたつねとりてよるもあたりちかくふせ給あけたてはねこのかしつきをしてなてやしなひたまふ人けとをかりし心もいとよくなれてともすれはきぬのすそにまつはれよりふしむつるゝをまめやかにうつくしと思ふいといたくなかめてはしちかくよりふし給へるにきてねうくといとらうたけになけはかきなてゝうたてもすゝむかなとほゝゑまる

恋わふる人のかたみとてならせはなれよなにとてなくねなるらむこれもむかしのちきりにやとかほをみつゝのたまへはいよくらうたけになくをふところにいれてなかめる給へりこたちなとはあやしくはかなるねこの時めくかなかやうなる物みいれたまはぬ御心にとゝかめけり宮よりめすにもまいらせずとりこめてこれをかたらひ給左大将殿の北のかたは大殿のきみたちよりも右大将

の君をはなをむかしのまゝにうとからす思ひきこえ給へり心はへのかとくしくくけちかくおはする君にてたいめんし給時くもこまやかにへたてたるけしきなくもてなし給つれば大将もしけいさなどのうとくしくをよひかたけなる御心さまのあまりなるにさまことなる御むつひにておもひかはし給へりおとこ君いまはましてかのはしめの北の方をもてはなれはてゝならひなくもてかしつきこえ給この御はらにはおとききわたちのかきりなれはさうくしくとてかのまきはしらのひめきみをえてかしつかまほしくし給へとおほち宮なとさらにゆるしたまはすこの君をたに人わらへならぬさまにてみむとおほしの給みこの御おほえいとやむことなく内にもこの宮の御心よせいとこよなくてこの事とそうし給ことをはえそむき給はす心くるしき物におもひきこえ給へりおほかたもいまめかしくおかしくおはする宮にてこの院大殿にさしつきたてまつりては人もまいりつかうまつり世人をもくおもひきこえけり大将もさる世のをもしとなり給へきしたかたなれはひめ君の御おほえなとてかはかるくはあらんきこえいつる人々事にふれておほかれとおほしもさためす衛門督をさもけしきはまとおほすへかめれとねこにはおもひおとしたてまつるにやかけても思ひよらぬそくちおしかりけるは、君のあやしくなをひかめる人にてよのつねのありさまにもあらずもてけちたまへるをくちおしきものにおほしてまゝは、の御あたりをは心つけてゆかしく思ひていまめきたる御心さまにそのしたまひける兵部卿宮なをひと所のみおはして御心につきておほしけることゝもはみなたかひて世中もすさましく人わらへにおほさるゝにさてのみやはあまえてすくすへきとおほしてこのわたりにけしきはみより給へれば大宮なにかはかしつかんとおもはむ女こをは宮つかへにつきてはみこたちこそはみせたてまつらめたゝ人のすくよかになをなをしきをのみいまの世の人のかしこくするしなゝきわさなりとのたまひていたくもなやましたてまつり給はすうけひき申給つみこあまりうらみところなきをさうくしくとおほせとおほかたのあなつりにくきあたりなれはえしもいひすへし給はておはしましそめぬいになくかしつきゝこえ給大宮は女こあまたものしたまひてさまくものなけかしきおりくおほかるにものこりしぬへけれとなをこのきみの事の思ひはなちかたくおほえてなん母きみはあやしきひか物にとしころにそへてなりまさりたまふ大将はたわか事にしたかはすとしておろかにみすてられためはいとなむ心くるしきとて御しつらひをもたちちる御てつから御らんしいれよろつにかたしけなく御心にはいれたまへり宮はうせ給にける北のかたを世とゝもにこひきこえたまひてたゝむかしの御ありさ

まににたてまつりたらむ人をみむとおほしけるにあしくはあらねとさまかはりてそ物したまひけるとおほすにくちおしくやありけむかよひたまふさまいと物うけなり大宮いと心月なきわさかなとおほしなけきたりは、君もさこそひかみたまへれとうつし心いてくる時はくちおしくうき世と思はて給大将の君もされはよいたく色めきたまへるみこそとはしめよりわか御心にゆるし給はさりし事なればにやものしと思ひ給へりかむの君もかくたのもしけなき御さまをちかくき、給にはさやうなる世中をみましかはこなたかたにかにおほしみ給はましくなまおかしくもあはれにもおほしいてけりそのかみもけちかくみきこえむとは思ふらさりきかした、なさけくしう心ふかきさまにのたまひわたりしをあえなくあはつけきやうにやき、おとし給けむといとはつかしくとしころもおほしたる事なればかゝるあたりにてき、給はむことも心つかひせらるへくなとおほすこれよりもさるへき事はあつかひきこえたまふせうとの君たちなどしてかゝる御けしきもしらすかほに、くからすきこえまつはしなとするに心くるしくてもてはなれたる御心はなきにおほ北のかたといふさかなものそつねにゆるしなくゑんしきこえ給みこたちはのとかにふた心なくてみ給はむをたにこそはなやかならぬなくさめには思ふへけれとむつかり給を宮ももりき、たまひてはいとき、ならはぬ事かなむかしいとあはれとおもひし人を、きても猶はかなき心のすさひはたえさりしかとかうきひしきものゑんしはことになかりし物を心月なくいと、むかしをこひきこえ給つ、ふるさとにうちなかめかちにのみおはしますさいひつ、もふたとせ許になりぬれはかゝる方にめなれてたゝさるかたの御中にてすくしたまふはかなくて年月もかさなりて内のみかと御くらゐにつかせたまひて十八年にならせ給ひぬつきの君とならせたまふへきみこおはしますものゝはへなきに世中はかなくおほゆるを心やすく思ふ人々にもたいめんしわたくしさまに心をやりてのとかにすきまほしくなむと、しころおほしのたまはせつるをひころいとをもくなやませたまふ事ありてにはかにおりゑさせたまひぬ世の人あかすさかりの御世をかくのかれたまふこと、おしみなけ、と春宮もをとひさせ給ひにたれはうちつきて世中のまつりことなとことにかはるけちめもなかりけりおほきおと、ちしのへうたてまつりてこもりゐたまひぬよの中のつねなきによりかくかしこきみかとのきみもくらゐをさりたまひぬるにとしふかき身のかうふりをかけむなにかおしからむとおほしのたまひて左大將右大臣になり給てそ世中のまつりことつかうまつり給ける女御の君はかゝる御世をもまちつけ給はてうせ給にければかきりある御くらゐをえたまへれとも

の、うしろの心ちしてかひなかりけり六条の女御の御はらのいちの宮はうにゐ
たまひぬさるへき事とかねておもひしかとさしあたりてはなをめてたくめおと
ろかる、わさなりけり右大将の君大納言になりたまひぬいよくあらまほしき
御なからひなり六条院はおりにゐたまひぬる冷泉院の御つきおはしまさぬをあか
す御心の内におほすおなしすちなれと思ひなやましき御事なくてすくしたまへ
るはかりにつみはかくれてすゑの世まではえつたふましかりける御すくせくち
おしくさうくしくおほせと人にのたまひあはせぬ事なれはいふせくなむ春宮
の女御はみこたちあまたかすそひ給ていと、御おほえならひなし源氏のうちつ
き、さきにゐたまふへきことを世人あかすおもへるにつけても冷泉院の後は
ゆへなくてあなちにかくしをきたまへる御心をおほすにいよく六条院の御
ことを年月にそへてかきりなく思ひきこえたまへり院の御かとおほしめし、や
うにみゆきも所せからてわたり給ひなとしつ、かくてしもけにめてたくあらま
ほしき御ありさまなりひめ宮の御事はみかと御心と、めておもひきこえ給ふお
ほかたの世にもあまねくもてかしつかれたまふをたいのうへの御いきをひには
えまさりたまはすとし月ふるまゝに御中いとうるはしくむつひきこえかはし給
ひていさ、かあかぬことなくへたてもみえたまはぬものからいまはかうおほそ
うのすまるならてのとやかにをこなひをもとなむおもふこの世はかはかりとみ
はてつる心ちするよはひにもなりにけりさりぬへきさまにおほしゆるしてよと
まめやかにきこえたまふおりくあるをあるましくつらき御事なりみつからふ
かきほいあることなれとまりてさうくしくおほえ給ひある世にかはらむ御
ありさまのうしろめたさによりこそなからふれつゐにそのこと、けなむのちに
ともかくもおほしなれなどのみさまたけきこえたまふ女御のきみた、こなたを
まことの御おやにもてなしきこえたまひて御方はかくれかの御うしろみにてひ
けしものしたまへるしもそなかく、ゆくさきたのもしけにめてたかりけるあま
きみもや、もすれはたえぬよろこひの涙ともすれはおちつ、めをさへのこひた
ゝらしていのちなかきうれしけなるためしになりてももし給すみよしの御願か
つゝはたし給はむとて春宮の女御の御いのりにまてたまはんとてかのはこあ
けて御覧すれはさまくのいかめしきこと、もおほかりとしことの春秋のかく
らにかならずなかき世のいのりをくはへたるくわんともけにかゝる御いきをひ
ならてははたし給へきこと、も思ひをきてさりけりた、はしりかきたるおもむ
きのさえくしくはかくしくほとけ神もき、いれ給へきことはあきらかな
りいかてさる山ふしのひしり心にかゝること、もを思ひよりけむとあはれにお

ほけなくも御らむさるへきにてはしかりそめに身をやつしけるむかしの世
のをこなひ人にやありけむなとおほしめくらすにいとゝかるゝしくもおほさ
れさりけりこのたひはこの心をはあらはしたまはすたゝ院の御ものまうてにて
いてたち給うらつたひのものはかしかりし程そこらの御くはんともみなはた
しつくし給へれともなを世中にかくおはしましてかゝる色ゝのさかえをみた
まふにつけても神のおほむたすけはわすれかたくてたいのうへもくしきこえさ
せたまひてまうてさせたまふひゝき世のつねならすいみしくことゝもそきすて
て世のわつらひあるましくとはふかせたまへとかきりありければめつらかによ
そほしくなむかんだちめも大臣ふた所をゝきたてまつりてはみなつかうまつり
給まひ人はゑふのすけとものかたちきよけにたけたちひとしきかきりをえらせ
給このえらひにいらぬをはちにうれへなけきたるすきものともありけりへい
しうもいはし水かものりむしのまつりなどにめす人ゝのみちみちのことにすく
れたるかきりをとゝのへさせ給へりくはゝりたるふたりなむ近衛つかさの名た
かきかきりをめしたりける御かくらの方にはいとおほくつかうまつれり内春宮
院の殿上人方ゝにわかれて心よせつかうまつるかすもしらすいろゝにつく
したるかんだちめの御むまくらむまそひ隨身ことねりわらはつきゝのとねり
なとまでとゝのへかさりたるみものまたなきさまなり女御殿たいのうへはひと
つにたてまつりたりつきの御くるまにはあかしの御方あま君しのひてのりたま
へり女御の御めのと心しりにてのりたりかたゝのひとたまゑうへの御方の五
女御とのゝいつゝあかしの御あかれの三目もあやにかさりたるさうそくありさ
まいへはさらなりさるあま君をはおなくはおいのなみのしはのふばかりに人
めかしくてまうてさせむと院はのたまひけれとこのたひはかくおほかたのひゝ
きにたちましらむもかたはらいたしもし思ふやうならむ世中をまちいてたらは
と御方はしつめ給けるをのこりのいのちうしろめたくてかつゝ物ゆかしかり
てしたひまいり給なりけりさるへきにてもとよりかくにほひたまふ御身ともよ
りもいみしかりける契あらはに思ひしらるゝ人のみありさまなり十月中の十日
なれば神のいかきにはふくすも色かはりて松の下もみちなとをとのみも秋を
きかぬかほなりことゝしきこまろこしのかくよりもあつまあそひのみゝな
れたるはなつかしくおもしろくなみかせのこゑにひゝきあひてさることかき松
風にふきたてたるはふえのねもほかにてきくしらへにはかはりて身にしみこと
にうちあはせたるひやうしもつゝみをはなれてとゝのへとりたる方おとろゝ
しからぬもなまめかしくすこうおもしろく所からはましてきこえけり山あるに

するたけのふしは松のみとりにみえまかひかさしの色ゝは秋のくさにことなるけちめわかれてなにことにもめのみまかひいろふもとめこはつるすゑにわかやかなるかむたちめはかたぬきておりたまふにほひもなく、ろきうへのきぬにすわうかさねのえひそめの袖をにはかにひきほころはしたるにくれなゐふかきあこめのたものうちしくれたるにけしきはかりぬれたる松はらをはわすれてもみちのちるに思ひわたさるみるかひおほかるすかたともにとしくかれたるおきをたかやかにかさしてた、ひとかへりまひていりぬるはいとおもしろくあかすそありけるおと、むかしのことおほしいてられ中比しつみ給し世のありさまもめのまへのやうにおほさる、にそのよのことうちみたれかたり給へき人もなければちしのおと、をそこひしく思ひきこえ給けるいりたまひて二のくるまにしのひて

たれか又心をしりて住吉の神世をへたる松にこと、ふ御た、むかみにかきたまへりあま君うちしほたるか、るよをみるにつけてもかのうらにていまはとわかれ給しほと女御の君のおはせしありさまなと思ひいつるもいとかたしけなかりける身のすくせの程を思ふよをそむき給し人も恋しくさま／＼に物かなしきをつはゆ、しとこといみして

すみのえをいけるかひあるなきさとは年ふるあまもけふやしるらんをそくはひむなからむとた、うちおもひけるま、なりけり

むかしこそまつわすられね住吉の神のしるしをみるにつけてもとひとりこちけり夜ひとよあそひあかしたまふはつかの月はるかにすみてうみのおもておもしろくみえわたるにしものいとこちたくをきて松原も色まかひてよろつの事そ、ろさむくおもしろさもあはれさもたちそひたりたいのうへつねのかきねの内なから時／＼につけてこそけふあるあさゆふのあそひにみ、ふりめなれ給けれみかとよりとのものみおさ／＼し給はすましてかく宮このほかのありきはまたならひ給はねはめつらしくおかしくおほさる

すみの江の松に夜ふかくをく霜は神のかけたるゆふかつらかもたかむらの朝臣のひらの山さへといひけるゆきのあしたをおほしやれはまつりのこ、ろうけたまふしるしにやといよ／＼たのもしくなむ女御のきみ

神ひとのてにとりもたる榊葉にゆふかけそふるふかきよの霜中つかさのき

み

はふりこかゆふうちまかひをく霜はけにいちしるき神のしるしかつき／＼かすしらすおほかりけるをなにせむにかはき、をかむか、るおりふしの歌はれ

いの上手めき給おとこたちも中くいてきえして松のちとせよりはなれていまめかしきことなければうるさくてなむほのくとあけゆくにしもはいよくふかくてもとすゑもたとくしきまでゑひすきにたるかくらおもてともをのかかほをはしらておもしろきことに心はしみてには火もかけしめりたるになを万さいくくとさかき葉をとりかへしつゝいはひきこゆる御世のすゑおもひやるそいと、しきやよろつのことあかすおもしろきまゝに千よをひとよになさまほしき夜のなにゝもあらてあけぬれはかへるなみにきほふもくちおしくわかき人ゝおもふ松はらにはるくたとてつゝけたる御くるまとも風のうちなひくしたすたれのひまゝもときはのかけに花のにしきをひきくわへたるとみゆるにうへのきぬの色くけちめをきておかしきかけはんとりつゝきてものまいりわたすをそしも人などはめにつきてめてたしとはおもへるあま君のおまへにもせんかうのおしきにあをにひのおもてをりてさうし物をまいるとてめさましき女のすくせかなとをのかしゝはしりうこちけりまうて給しみちはことくしくてわつらはしき神たからさまくゝに所せけなりしをかへさはよろつのせうようをつくし給いひつゝくるもうるさくむつかしきことゝもなれはかゝる御ありさまをもかの入道のきかすみぬ世にかけはなれたまへるのみなんあかさりけるかたきことなりかしましらはましもみくるしくや世中の人これをためしにて心たかくなりぬへきころなめりよろつのことにつけてめてあさみ世のことくさにてあかしのあま君とそさいはひ人にいひけるかのちしの大殿のあふみのきみはすくろくうつ時のことはにもあかしのあま君くゝとそさいはこひける入道のみかとは御をこなひをいみしくし給て内の御事をもきゝいれ給はす春秋の行幸になむむかし思ひいてられ給事もましりけるひめ宮の御ことをのみそ猶えおほしはなたてこの院をは猶おほかたの御うしろみに思ひきこえ給て内くゝの御心よせあるへくそうせさせ給二品になりたまひて御封なとまさるいよくゝはなやかに御いきをひそふたいのうへかく年月にそへて方くゝにまさり給御おほえにわか身はたゝひと所の御もてなしに人にはをとらねとあまりとしつもりなはその御心はへもつるにをとろへなむさらむ世をみはてぬさきに心とそむきにしかなとたゆみなくおほしわたれとさかしきやうにやおほさむとつゝまれてはかくしくもえきこえ給はす内のみかたさへ御心よせことにきこえ給へはをろかにきかれたてまつらむもいとおしくてわたり給ことやうくゝひとしきやうになりゆくさるへきことくゝはりとは思ひなからされはよとのみやすからすおほされけれと猶つれなくおなしさまにてすくし給春宮の御さしつきの女一の宮をこなたにとりわ

きてかしつきたてまつりたまふその御あつかひになむつれゝなる御よかれの
ほともなくさめ給ひけるいつれもわかすうつくしくかなしと思ひきこえ給へり
夏の御方はかくとりゝなる御むまこあつかひをうらやみて大将の君のないし
のすけはらの君をせちにむかへてそかしつき給いとおかしけにて心はへもほと
よりはされおよすけたれはおとゝの君もらうたかりたまふすくなき御つきとお
ほししかとすゑゝにひろこりてこなたかなたいとおほくなりそひたまふをい
まはたゝこれをうつくしみあつかひたまひてそつれゝもなくさめ給ける右の
大殿のまいりつかうまつり給こといにしへよりもまさりてしたしくいまは北の
方もをとなひはてゝかのむかしのかけゝしきすち思ひはなれ給にやさるへき
おりもわたりまうてたまふたいのうへにも御たいめむありてあらまほしくきこ
えかはし給けりひめ宮のみそおなしさまにわかくおほときておはします女御の
君はいまはおほやけさまにおもひはなちきこえ給ひてこの宮をはいと心くるし
くをさなからむ御むすめのやうに思ひはくゝみたてまつり給朱雀院のいまはむ
けに世ちかくなりぬる心ちして物心ほそきをさらにこの世のことかへりみしと
思ひすつれとたいめむなんいまひとたひあらまほしきをもしうらみのこりもこ
そすれこととしきさまならてわたり給へくきこえ給ければおとゝもけにさる
へき事也かゝる御けしきなからむにてたにすゝみまいり給へきをましてかうま
ちきこえ給ひけるか心くるしきことゝまいり給へきことおほしまうくついてな
くすさましきさまにてやはゝひわたり給へきなにわさをしてか御覽せさせ給へ
きとおほしめくらすこのたひたり給はむとしわかなゝとてうしてやなとおほし
てさまゝの御ほうふくのこといもゐの御まうけのしつらいなにくれとさまこ
とにかはれることゝもなれは人の御心しらひとみりつゝおほしめくらすいに
しへもあそひの方に御心とゝめさせ給へりしかはまひ人かく人などを心ことに
さためすぐれたるかきりとゝのへさせ給右のおほ殿の御子ともふたり大将の
御こ内侍のすけはらのくはへて三人またちいさきなゝつよりかみのはみな殿上
せさせたまふ兵部卿の宮のわらはそむわうすへてさるへき宮たちの御ことも家
のこのきみたちみなえらひいてたまふ殿上のきみたちもかたよくおなしきま
ひのすかたも心ことなるへきをさためてあまたのまひのまうけをせさせ給いみ
しかるへきたひのことゝてみな人心をつくし給てなむみちゝのものゝし上手
いとまなきころ也宮はもとより琴の御ことをなむならひ給ひけるをいとわかく
て院にもひきわかれたてまつりたまひしかはおほつかなくおほしてまいりたま
はむつゐてにかの御ことのねなむきかまほしきさりとて琴はかりはひきとり給

へらむとしりうことにきこえ給けるを内にもきこしめしてけにさりともしけはひ
ことならむかし院の御まへにて、つくし給はむついてにまいりきてきかはやな
とのたまはせけるをおと、の君はつたへき、給て年比さりぬへきついてことに
はをしへきこゆることもあるをそのけはひはけにまさりたまひにたれとまたき
こしめし所ある物ふかき手にはをよはぬをなに心もなくてまいりたまへらむつ
いてにきこしめさむとゆるしなくゆかしからせ給はむはいとはしたなかるへき
事にもといとおしくおほしてこのころそ御心と、めてをしへきこえたまふしら
へことなる手ふたつみつおもしろき大くとも四季につけてかはるへきひ、
きそらのさむさぬるさをと、のへいて、やむことなかるへき手のかきりをとり
たて、をしへきこえたまふに心もとなくおはするやうなれとやう／＼心えたま
ふま、にいとよくなり給ひるはいと人しけくなをひとたひもゆしあむするいと
まも心あはた、しければよる／＼なむしつかにことの心もしめたてまつるへき
とてたいにもそのころは御いとまきこえ給てあけくれをしへきこえ給女御のき
みにもたいのうへにも琴はならはしたてまつり給はさりければこのおりおさ
／＼み、なれぬ手ともひき給らんをゆかしとおほして女御もわさとありかたき
御いとまをた、しはしときこえ給てまかてたまへりみこふた所をはするを又も
けしきはみ給ていつ月許にそなり給へれば神わさなどに事つけておはしますな
りけり十一月すくしてはまいり給へき御せうそうちしきりあれとかゝるつい
てにかくおもしろきよる／＼の御あそひをうらやましくなとてわれにつたへ給
はさりけむとつらく思ひきこえ給冬の夜の月は人にたかひてめてたまふ御心な
れはおもしろき夜のゆきの光におりにあひたる手ともひきたまひつゝさふらふ
人ゝもすこしこのかたにほのめきたるに御ことゝもとり／＼にひかせてあそひ
なとし給年のくれつかたはたいなどにはいそかしくこなたかなたの御いとなみ
にをのつから御らむしいるゝ事ともあれは春のうらゝかならむ夕へなどにいか
てこの御ことのねきかむとのたまひわたるにとしかへりぬ院の御賀まつおほや
けよりせさせ給ことゝもちたきにさしあひてはひんなくおほされてすこしほ
とすこしたまふ二月十よ日とさためたまひてかくにんまひ人などまいりつゝ御
あそひたえすこのたいにつねにゆかしくする御ことのねいかてかの人ゝのさう
ひはのねもあはせて女かく心みさせむたゝいまのものゝ上手ともこそさらにこ
のわたりの人ゝのみ心しらひともにまさらねはか／＼しくつたへとりたる事は
おさ／＼なけれとなに事もいかて心にしらぬことあらしとなむをさなきほとに
思ひしかは世にあるものゝしといふかきり又たかきいへ／＼のさるへき人のつ

たへともゝのこさす心みし中にいとふかくはつかしきかなとおほゆるきはの人
なむなかりしそのかみよりも又このころのわかき人ゝのされよしめきすくすに
はたあさくりにたるへしきむはたましてさらにまねふ人なくなりたりとか
この御ことのねはかりたにつたへたる人おさゝあらしとのたまへはなにこゝ
ろなくうちゑみてうれしくかくゆるしたまふほどになりけるとおほす廿一二
はかりになりたまへとなをいといみしくかたなりにきひはなる心ちしてほそく
あえかにうつくしくのみみえたまふ院にもみえたてまつり給はてとしへぬるを
ねひまさり給にけりと御らんすはかりよういくわへてみえたてまつりたまへと
事にふれてをしへきこえたまふけにかゝる御うしろみなくてはましていはけな
くおはします御ありさまかくれなからましと人々もみたてまつる正月廿日許に
なればそもおかしきほどに風ぬるくふきておまへのむめもさかりになりゆき
おほかたの花の木ともゝみなけしきはみかすみわたりにけり月たゝは御いそぎ
ちかく物さはかしからむにかきあはせ給はむ御ことのねもしかくめきて人いひ
なさむをこのころしつかなるほどに心み給へとてしむてんにわたしたてまつり
給ふ御ともにわれもゝと物ゆかしかりてまうのほらまほしかれとこなたにと
をきをはえりとゝめさせ給てすこしねひたれとよしあるかきりえりてさふらは
せ給ふわらはへはかたちすぐれたる四人あか色にさくらのかさみうすいろのを
りものゝあこめうきもののうへのはかまくれなるのうちらるさまもてなしすく
れたるかきりをめしたり女御の御方にも御しつらひなといとゝあらたまれるこ
ろのくもりなきにをのゝいとましくつくしたるよそおひともあさやかににな
しわらはゝあをいろにすわうのかさみからあやのうへのはかまあこめは山ふき
なるからのきをおなしさまにとゝのへたりあかしの御方のはことゝしからて
こうはいふたりさくらふたりあをしのかきりにてあこめこくうすくうちめなど
えならてきせたまへり宮の御方にもかくつとひたまふへくきゝ給てわらはへの
すかたはかりはことにつくろはせたまへりあをにゝやなきのかさみえひそめの
あこめなどことにこのましくめつらしきさまにはあらねとおほかたのけはひの
いかめしくけたかきことさへいとならひなしひさしの中の御さうしをはなちて
こなたかなたみ木ちやうはかりをけちめにて中のまは院のおはしますへきおま
しよそひたりけふの拍子あはせにはわらはへをめさむとて右のおほいとのゝ三
らうかむのきみの御はらのあに君さうのふえ左大将の御たらうよこふえとふか
せてすのこにさふらはせたまふ内には御しとねともならへて御ことゝもまいり
わたすひしたまふ御ことゝもうるはしきこんちのふくろともにいれたるとりい

て、あかしの御方には琵琶むらさきのうへには和琴女御のきみにさうの御こと
宮にはかくことくしきことはまたえひきたまはすやとあやうくてれいのでな
らし給へるをそしらへてたてまつり給さうの御ことはゆるふとなれとなをか
くものにあはするおりのしらへにつけてことちのたちとみたる、物也よくその
心しらひと、のふへきを女はえはりしつめしなを大将をこそめしよせつへかめ
れこのふえふきともまたいとをさなけにて拍子と、のへむたのみつよからすと
わらひ給て大将こなたにとめせは御方くはつかしく心つかひしておはすあか
しの君をはなちてはいつれもみなすてかたき御弟子ともなれは御心くはへて大
将のき、たまはむになんかなるへくとおほす女御はつねにうへのきこしめすに
もものにあはせつ、ひきならし給つれはうしろやすきを和こんこそいくはくな
らぬしらへなれとあとさたまりたる事なくて中く女のたとりぬへけれ春のこ
とのねはみなかきあはするものなるをみたる、所もやとなまいとおしくおほす
大将いといたく心けさうしておまへのことくしくうるはしき御こ、ろみあら
むよりもけふの心つかひはことにまさりておほえ給へはあさやかなる御なおし
かうにしみたる御そともそていたくたきしめてひきつくろひてまいり給ほとく
れはてにけりゆへあるたそかれ時のそらに花はこそふる雪思いてられてえた
もたわむばかりさきみたりゆるらかにうちふく風にえならすにほひたるみ
すの内のかほりもふきあはせてうくひすさそふつまにしつへくいみしきおと、
のあたりのにほひ也みすのしたよりさうの御ことのすそすこしさいいて、かる
くしきやうなれとこれかと、のへてしらへ心み給へこ、に又うとき人のい
るへきやうもなきをとのたまへはうちかしこまりてたまはり給ほとよいおほ
くめやすくていちこちてうのこゑにはつのを、たて、ふともしらへやられてさふ
らひ給へはなをかきあはせ許は手ひとつすさましかってこそとのたまへはさら
にけふの御あそひのさしいらへにましらふ許の手つかひなんおほえす侍けると
けしきはみたまふさもあることなれと女かくにえことませてなむにけにけると
つたはらむ名こそおしけれとてわらひ給しらへはて、おかしきほとにかきあは
せばかりひきてまいらせたまひつこの御むまこの君たちのいとうつくしきとの
ゐすかたともにてふきあはせたる物の手ともまたわかかれとおいさきありてい
みしくおかしけなり御こと、ものしらへともと、のひはて、かきあはせ給へる
ほといつれとなきなかにひは、すくれて上手めき神さひたるてつかひすみはて
ておもしろきこゆ和こんに大将もみ、と、め給へるになつかしくあいきやう
つきたる御つまをとにかきかへしたるねのめつらしくいまめきてさらにこのわ

さとある上手ものおとろくしくかきたたるしらへてうしにとらすにきは、しくやまとことにもかゝる手ありけりとき、おとろかるふかき御らうのほとあらはにきこえておもしろきにおと、御心おちゐていとありかたくおもひきこえ給さうの御ことはものゝひまゝに心もとなくもりいつるものゝねからにてうつくしけになまめかしくのみきこゆきむはなをわかき方なれとならひ給さかりなればたとくしからすいとよく物にひゝきあひていうになりける御ことのねかなと大将き、給拍子とりてさうかし給院も時くあふきうちならしてくはへ給御こゑむかしよりもいみしくおもしろくすこしふつゝかに物くしきけそひてきこゆ大将もこゑいとすくれたまへる人にて夜のしつかになりゆくまゝにいふかきりなくなつかしき夜の御あそひなり月心もとなきころなれはどうろこなたかなたにかけて火よきほとにもさせ給へり宮の御方をのそき給へれは人よりけにちいさくうつくしけにてたゝ御そのみある心ちすにほひやかなる方はをくれてたゝいとあてやかにおかしく二月の中十日許のあをやきのわつかにしたりはしめたらむ心ちしてうくひすのはかせにもみたれぬへくあえかにみえ給さくらのほそなかに御くしはひたりみきよりこほれかゝりてやなきのいとのさましたりこれこそはかきりなき人の御ありさまなめれとみゆるに女御のきみはおなしやうなる御なまめきすかたのいますこしにほひくはゝりてもてなしけはひ心にくゝよしあるさまし給てよくさきこほれたるふちの花の夏にかゝりてかたはらにならふ花なきあさほらけの心ちそし給へるさるはいとふくらかなるほとになり給てなやましくおほえ給ければ御こともおしやりてけうそくにおしかゝり給へりさゝやかになよひかゝり給へるに御けうそくはれいのほとなれはをよひたる心ちしてことさらにちいさくつくらはやとみゆるそいとあはれけにおはしけるこうはいの御そに御くしのかゝりはらくゝときよらにてほかけの御すかた世になくうつくしけなるにむらさきのうへはえひそめにやあらむ色こきこうちきうすゝわうのほそなかに御くしのたまれるほとこちたくゆるらかにおほきさなとよきほとにやうたいあらまほしくあたりにゝほひみちたる心ちして花といはゝさくらにたとへてもなをものよりすぐれたるけはひことに物し給かゝる御あたりにあかしはけをさるへきをいとさしもあらずもてなしなどけしきはみはつかしく心のそこゆかしきさましてそこはかとなくあてになまめかしくみゆ柳のをりものゝほそなかにもえきにやあらむこうちきゝてうすものゝものはかなけなるひきかけてことさらにひけしたれとけはひ思ひなしも心にくゝあなつらはしからすこまのあをちのにしきのはししたるしとねにまほにもゐて

ひはをうちをきてたゝけしき許ひきかけてたをやかにつかひなしたるはちのも
てなしねをきくよりも又ありかたくなつかしくてき月まつ花たちはなのはなも
みもくしてをしておれるかほりおほゆこれもかれもうちとけぬ御けはひとをき
ゝみ給に大将もいと内ゆかしくおほえ給たいのうへのみしおりよりもねひまさ
りたまへらむありさまゆかしきにしつ心もなし宮をはいますこしのすくせをよ
はましかはわかものにもみたてまつりてまし心のいとぬるきそくやしきや院
はたひくさやうにおもむけてしりう事にもたまはせけるをとねたく思へと
すこし心やすき方にみえたまふ御けはひにあなつきこゆとはなれといとし
も心はうこかさりけりこの御方をはなにもおもひをよふへきかたなくけと
をくてとしころすきぬれはいかてかたゝおほかたに心よせあるさまをもみえた
てまつらむと許のくちおしくなけかしきなりけりあなちにあるましくおほけ
なき心ちなどはさらにものし給はすいとよくもおさめ給へり夜ふけゆくけは
ひひやゝかなりふしまちの月はつかにさしいてたる心もとなしや春のおほろ月
よ、秋のあはれはたかうやうなるものゝねにむしのこゑよりあはせたるたゝな
らすこよなくひゝきそふ心ちすかしとのたまへは大将の君秋のよのくまなき月
にはよろつのものゝとゝこほりなきにことふえのねもあきらかにすめる心ちは
し侍れとなをことさらにづくりあはせたるやうなるそらのけしき花のつゆにも
色くめうつろひ心ちりてかきりこそ侍れ春のそらのたとくしきかすみのま
よりおほろなる月かけにしつかにふきあはせたるやうにはいかてかふえのねな
ともえむにすみのほりはてすなむ女は春をあはれふとふるき人のいひをき侍け
るけにさなむ侍けるなつかしくものゝとゝのほる事は春のゆふくれこそことに
侍けれと申給へはいなこのさためよいにしへより人のわきかねたることをすゑ
の世にくたれる人のえあきらめははつましくこそものゝしらへこくのものと
はしもけにりちをはつきのものにしたるはさもありかしなどのたまひていかに
たゝいまいうそくおほえたかきその人かの人御前などにてたひく心みさせ給
にすぐれたるはかすゝくなくなりためるをそのこのかみとおもへる上手ともい
くはくえまねひとらぬにやあらむこのほのかなる女たちの御中にひきませたら
むにきはゝなるへくこそおほえねとしころかくむもれてすくすにみゝなどもす
こしひかくしくなりたるにやあらむくちおしうなむあやしく人のさえはか
なくとりすることゝもゝものゝはえありてまさるところなるその御前の御あそ
ひなどにひときさみにえらはるゝ人くそれかれといかにそとの給へは大将そ
れをなむとり申さむと思ひ侍りつれとあきらかならぬ心のまゝにおよすけてや

はと思給ふるのほりての世をき、あはせ侍らねはにや衛門督の和琴兵部卿宮の御ひわなをこそこのころめつらかなるためしにひきいて侍めれけにかたはらなきをこよひうけたまはるもの、ねどものみなひとしくみ、おとろき侍はなをかくわさともあらぬ御あそひとかねて思給へたゆみける心のさはくにや侍らむさうかなといつかうまつりにく、なむ和琴はかのおと、許こそかくをりにつけてこしらへなひかしたるねなど心にまかせてかきたて給へるはいとことにものし給へおさくきははなれぬ物に侍へめるをいとかしこくと、のひてこそ侍りつれとめてきこえたまふいとさことくしき、はにはあらぬをわさとうるはしくもとりなさる、かなとてしたりかほにほ、ゑみたまふけにけしうはあらぬ弟子ともなりかし琵琶はしもこ、にくちいるへきことましらぬをさいへと物のけはひとなるへしおほえぬ所にてき、はしめたりしにめつらしきもの、こゑかなとなむおほえしかとそのおりよりは又こよなくまさりにたるをやとせめてわれかしこにかこちなし給へは女房などはすこしつきしろふよろつのことみちくにつけてならひまねは、さえといふ物いつれもきはなくおほえつ、わか心にあくへきかきりなくならひとらむ事はいとかたけれとなにかはそのたとりふかき人のいまの世におさくなければかたはしをなたらかにまねひえたらむ人さるかたかとに心をやりてもありぬへきを琴なむ猶わつらはしく手ふれにくき物はあるけるこのことはまことにあとのま、にたつねとりたるむかしの人は天地をなひかしおに神の心をやわらけよろつのもの、ねのうちにしたかひてかなしひふかきものもよろこひにかはりいやしくまつしき物もたかき世にあらたまりたからにあつかり世にゆるさる、たくひおほかりけりこのくに、ひきつたふるはしめつかたまでふかくこの事を心えたる人はおほくのとしをしらぬくに、すこし身をなきになしてこのことをまねひとらむとまとひてたにしうるはかたくなむありけるけにはたあきらかにそらの月ほしをうこかし時ならぬしもゆきをふらせくもいかつちをさはかしたるためしあかりたる世にはありけりかくかきりなき物にてそのま、にならひとる人のありかたく世のすゑなれはにやいつこのそのかみのかたはしにかはあらむされとなをかのおに神のみ、と、めかたふきそめにける物なれはにやなまくにまねひて思かなはぬたくひありけるのちこれをひく人よからすとかいふなむをつけてうるさきま、にいまはおさくつたふる人なしとかいとくちおしき事にこそあれきんのねをはなれてはなにごとをかものをと、のへしるくへとはせむけによろつのことおとろふるさまはやすくなりゆく世の中にひとりいてはなれて心をたて、もろこしこまここ

の世にまとひありきおやこをはなれむことは世中にひかめる物になりぬへしな
とかなのめにてなをこのみちをかよはしるはかりのはしをはしりをかさらむ
しらへひとつに手をひきつくさんことたにはかりもなき物な、りいはむやおほ
くのしらへわつらはしきこくおほかるを心にいりしさかりには世にありとあり
こゝにつたはりたるふといふものゝかきりをあまねくみあはせてのちくは師
とすへき人もなくてなむこのみならひしかと猶あかりての人にはあたるへくも
あらしをやましてこのゝちといひてはつたはるへきすゑもなきいとあはれにな
むなどのたまへは大将けにいとくちおしくはつかしとおほすこの御子たちの御
中におもふやうにおいゝて給ものしたまはゝそのよになむそもさまでなからへ
とまるやうあらはいくはくならぬてのかきりもとゝめたてまつるへき二宮いま
よりけしきありてみえたまふをなどのたまへはあかしの君はいとおもたゝしく
涙くみてきゝゐたまへり女御のきみはさうの御ことをはうへにゆつりきこえて
よりふし給ひぬれはあつまをおとゝの御まへにまいりてけちかき御あそひにな
りぬかつらきあそひ給はなやかにおもしろしおとゝおりかへしうたひ給御こゑ
たとへんかたなくあいきやうつきめてたし月やうくさしあかるまゝに花の色
かももてはやされてけにいと心にくきほど也さうのことは女御の御つまをとほ
いとらうたけになつかしくはゝ君の御けはひくはゝりてゆのねふかくいみしく
すみてきこえつるをこの御てつかひは又さまかはりてゆるゝかにおもしろくき
く人たゝならすすゝろはしきまであいきやうつきてりむの手なとすへてさらに
いとかとある御ことのねなりかへりこゑにみなしらへかはりてりちのかきあは
せともなつかしくいまめきたるにきんはこかのしらへあまたの手のなかに心と
ゝめてかならすひき給へき五六のはちをいとおもしろくすましてひき給さらに
かたほならすいとよくすみてきこゆ春秋よろつのものにかよへるしらへにてか
よはしわたしつゝひき給心しらひをしへきこえ給さまかへすいとよくわきま
へたまへるをいとうつくしくおもたゝしく思ひきこえ給このきみたちのいとう
つくしくふきたてゝせちに心いれたるをらうたかり給てねふたくなりいたらむ
にこよひのあそひはなかくはあらてはつかなるほとにと思ひつるをとゝめかた
きものゝねともものいつれともなきをきゝわくほとのみゝとからぬたとくしき
にいたくふけにけり心なきわさなりやとてさうのふえふくきみにかはらせし
給て御そぬきてかつけ給よこふえのきみにはこなたよりをりものゝほそなかに
はかまなとことくしからぬさまにけしきはかりにて大将の君には宮の御方よ
りさか月さしいてゝ宮の御さうそくひとくたりかつけたてまつり給をおとゝあ

やしやものゝ師をこそまつはものめかし給はめうれはしき事也とのたまふに宮のおはしますみ木ちやうのそはより御ふえをたてまつるうちわらひ給てとり給いみしきこまふえなりすこしふきならし給へはみなたちいて給ほとに大将たちとまり給て御このもちたまへるふえをとりていみしくおもしろくふきたて給へるかいとめてたくきこゆれはいつれもくみな御手をはなれぬものゝつたへくくいとなくのみあるにてそわか御さえの程ありかたくおほしゝられける大將殿はきみたちを御くるまにのせて月のすめるにまかて給みちすからさうのこのかはりていみしかりつるねもみゝにつきてこひしくおほえたまふわか北の方は故大宮のをしへきこえ給しかと心にもしめ給はさりしほとにわかれたてまつりたまひにしかはゆるゝかにもひきとりたまはておとこ君の御まへにてははちてさらにひきたまはすなにこともたゝおひらかにうちをほときたるさましてこともものあつかひをいとまなくつきくし給へはおかしき所もなくおほゆさすかにはあらしくてもものねたまうちしたるあいきやうつきてうつくしき人さまにそののし給める院はたいへわたり給ひぬうへはとまり給て宮にも御ものかたりなときこえたまひてあか月にそわたり給へるひたかうなるまておほとこのこもれり宮の御ことのねはいとうるさくなりけりないかゝきゝ給しときこえ給へはしめつかたあなたにてほのきゝしはいかにそやありしをいとこよなくなりけりいかてかはかくこと事なくをしへきこえたまはむにはといらへきこえたまふさかしてをとるくおほづかなからぬものゝ師なりかしこれかれにもうるさくわつらはしくていとまいるわさなれはおしへたてまつらぬを院にも内にも琴はさりともならはしきこゆらむとのたまふときくかいとおしくさりともしさはかりのことをたにかくとりわきて御うしろみにとあつけたまへるしるしにはと思ひおこしてなむなときこえ給ついてにもむかしよつかぬほとをあつかひ思ひしさまその世にはいとまもありかたくて心のとかにとりわきをしへきこゆる事なともなくちかき世にもなにとなくつきくまきれつゝすくしてきゝあつかはぬ御ことのねのいてはへしたりしもめむほくありて大將のいたくかたふきおとろきたりしけしきも思ふやうにうれしくこそありしかなときこえ給かやうのすちもいまは又おとなくしく宮たちの御あつかひなどゝりもちてし給さまもいたらぬ事なくすへてなにつけてももとかしくたとくしきことましらすありかたき人の御ありさまなれはいとかくくしぬる人はよにひさしからぬためしもあるをとゆゝしきまで思ひきこえ給さまくくなる人のありさまをみあつめたまふまゝにとりあつめたらひたることはまことにたくひあらしとのみ思ひき

こえ給へりことは三十七にそなり給みたてまつり給し年月のことなともあはれにおほしいてたるついでにさるへき御いのりなとつねよりもとりわきてことしはつゝしみたまへものさはかしくのみありておもひいたらぬ事もあらむを猶おほしめくらしておほきなることゝもし給はゝをのつからせさせてむこそうつのものし給はすなりにたるこそいとくちおしけれおほかたにてうちたのまむにもいとかしこかりし人をなどのたまひいつみつからはをさなくより人にことなるさまにてことゝしくおいてゝいまの世のおほえありさましかたにたくひすくなむありけるされと又よにすくれてかなしきめをみるかたも人にはまさりけりかしまつは思ふ人にさまゝをくれのこりとまれるよはひのすゑにもあかすかなしと思ふことおほくあちきなくさるましきことにつけてもあやしくものおもはしく心にあかすおほゆることそひたる身にてすきぬれはそれにかへてやおもひしほとよりはいまゝてもなからふるならむとなん思ひしらるゝ君の御身にはかのひとふしのわかれよりあなたこなた物思ひとて心みたり給許のことあらしとなんおもふきさきといひましてそれよりつきゝはやむことなき人といへとみなかならずやすからぬ物おもひそふさ世たかきましらひにつけても心みたれ人にあらそふ思ひのたえぬもやすけなきをおやのまとの内なからすくしたまへるやうなる心やすきことはなしその方人にすくれたりけるすくせとはおほししるや思ひのほかにこの宮のかくわたりものし給へるこそはなまくるしかるへけれとそれにつけてはいとゝくはふる心さしのほとを御身つからのうへなれはおほししらすやあらむものゝ心もふかくしり給めれはさりとともとなむ思ふときこえたまへはのたまふやうに物はかなき身にはすきにたるよそのおほえはあらめと心にたえぬものなけかしさのみうちそふやさはみつからのいのりなりけるとてのこりおほけなるけはひはつかしけなりまめやかにはいとゆくさきすくなき心ちするをことしもかくしらすかほにてすくすはいとうしろめたくこそさきゝもきこゆる事いかで御ゆるしあらはときこえ給それはしもあるましき事になんさてかけはなれ給ひなむ世にのこりてはなにのかひかあらむたゝかくなにとなくてすくる年月なれとあけくれのへたてなきうれしさのみこそますことなくおほゆれ猶思ふさまことなる心のほとをみはて給へとのみきこえ給をれいのことゝ心やましくてなみたくみたまへるけしきをいとあはれにみたてまつり給てよろつにきこえまきはし給おほくはあらねと人のありさまのとりゝにくちおしくはあらぬをみしりゆくまゝにまことのこゝろはせおひらかにおちゐたるこそいとかたきわさなりけれとなむ思ひはてにたる大将のはゝ君

をおさなりしほとにみそめてやむことなくえさらぬすちには思ひしをつねに
なかよからすへたてある心ちしてやみにしこそいま思へはいとおしく、やしく
もあれ又わかあやまちにのみもあらさりけりなと心ひとつになむ思ひいつるう
るはしくをもちかにてそのことのあかぬかなとおほゆる事もなかりきた、いと
あまりみたれたる所なくすく／＼しくすこしさかしとやいふへかりけむと思ふ
にはたのもしくみるにはわつらはしかりし人さまになん中宮の御は、みやす所
なんさまことに心ふかくなまめかしきためしにはまつ思ひいてらるれと人みえ
にく、くるしかりしまになんありしうらむへきふしそけにことほりとおほゆ
るふしをやかてなかくおもひつめてふかくゑんせられしこそいとくるしかりし
か心ゆるひなくはつかしくて我も人もうちたゆみあさゆふのむつひをかさはむ
にはいとつゝましき所のありしかはうちとけてはみおとさるゝ事やなどあまり
つくろひしほとにやかてへたゝりし中そかしとあるましき名をたちて身のあ
はく／＼くなりぬるなけきをいみしく思ひしめ給へりしかいとおしくけに人か
らをおもひしも我つみある心ちしてやみにしなくさめに中宮をかくさるへき御
契とはいひなからとりたてゝ世のそしり人のうらみをもしらす心よせたてまつ
るをかの世なからもみなおされぬらむ今もむかしもなをさりなる心のすさひに
いとおしく、やしき事もおほくなんときし方の人の御うへすこしつゝのたまひ
いてゝ内の御方の御うしろみはなに許のほとならずとあなつりそめて心やすき
ものにおもひしを猶心のそこみえすきはなくふかき所ある人になむうはへは人
になひきおひらかにみえなからうちとけぬけしきしたにこもりてそこはかとな
くはつかしき所こそあれとのたまへはこと人はみねはしらぬをこれはまほなら
ねとをのつかかけしきみるおり／＼もあるにいとうちとけにくゝ心はつかしき
ありさましるきをいとたとしへなきうらなさをいかにみ給らんとつゝましけれ
と女御はをのつかからおほしゆるすらんとのみ思ひてなむとのたまふさはかりめ
さましと心をき給へりし人をいまはかくゆるしてみえかはしなどし給も女御の
御ためのま心なるあまりそかしとおほすにいとありかたければ君こそはさすか
にくまなきにはあらぬものから人により事にしたかひいとよくふたすちに心つ
かひはし給けれさらにこゝらみれと御ありさまにゝたる人はなかりけりいとけ
しきこそものし給へとほゝゑみてきこえ給宮にいとよくひきとり給へりしこと
のよろこひきこえむとてゆふつかたわたり給ぬわれに心をく人やあらむとおお
ほしたゝすいといたくわかひてひとへに御ことに心いれておはすいまはいとま
ゆるしてうちやすませ給へかし物の師は心ゆかせてこそいとくるしかりつる日

ころのしるしありてうしろやすくなり給にけりとて御ことゝもおしやりておほとこのこもりぬたいにはれいのおはしまさぬ夜はよるゐしたまひてひとくゝに物かたりなとよませてきゝ給かく世のたとひにいひあつめたるむかしかたりともにもあたる男色このみふた心ある人にかゝつらひたる女かやうなる事をいひあつめたるにもつるによるかたありてこそあめれあやくうきてもすくしつるありさまかなけにのたまひつるやうに人よりことなるすくせもありける身なから人のしのひかたくあかぬ事にするもの思ひはなれぬ身にてやゝみなむとすらんあちきなくもあるかなと思ひつゝけて夜ふけておほとこのこもりぬるあか月かたより御むねをなやみ給人ゝみたてまつりあつかひて御せうそこきこえさせむときこゆるをいとひんないことゝせいし給てたへかたきをおさへてあかしたまふつ御身もぬるみて御心ちもいとあしけれと院もとみにわたりたまはぬ程かくなむともきこえす女御の御かたより御せうそこあるにかなやましくてなむときこえ給えるにおとろきてそなたよりきこえたまへるにむねつふれていそぎわたり給へるにいとくるしけにておはすいかなる御心ちそとてさくりたてまつり給へはいとあつくおはすれはきのふきこえ給し御つゝしみのすちなとおほしあはせ給ていとおそろしくおほさる御かゆなどこなたにまいらせたれと御覽しもしれすひゝとひそひおはしてよろつにみたてまつりなけき給はかなき御くた物をたにいと物うくし給ておきあかり給事たえて日ころへぬいかならむとおほしきはきて御いのりともかすしらすはしめさせ給そうめして御かちなとせさせ給そこ所ともなくいみしくくるしくし給てむねは時々おこりつゝわつらひ給さまたへかたくくるしけなりさまゝの御つゝしみかきりなけれとしるしもみえすをもしとみれとをのつからをこたるけちめあらはたのもしきをいみしく心ほそくななしとみたてまつり給にこと事おほされねは御賀のひゝきもしつまりぬかの院よりもかくわつらひ給よしきこしめして御とふらひいとねんころにたひくゝきこえ給おなしさまにて二月もすきぬいふかきりなくおほしなきて心みに所をかへ給はむとて二条院にわたしたてまつり給ひつ院のうちゆすりみちて思ひなけく人おほかり冷泉院もきこしめしなけくこの人うせたまはゝ院もかならず世をそむく御ほいとけたまひてむと大将の君なども心をつくしてみたてまつりあつかひ給てみすほうなどはおほかたのをはさる物にてとりわきてつかうまつらせ給いさゝか物おほしわくひまにはきこゆる事をさも心うくとのみうらみきこえ給へとかきりありてわかれば給はむよりもめのまへにわか心とやつしすて給はむ御ありさまをみてはさらにかた時たふましくのみおしくかなしか

るへければむかしよりみつからそかゝるほいふかきをとまりてさうくしくおほされん心くるしさにひかれつゝ、すぐすをさかさまにうちすてたまはむとやおほすとのみおしみきこえ給にけにいとたのみかたけによはりつゝ、かきりのさまにみえ給おりくおほかるをいかさまにせむとおほしまとひつゝ、宮の御方にもあからさまにわたりたまはす御ことゝもすさましくてみなひきこめられ院のうちの人はみなあるかきり二条院につとひまいりてこの院には火をけちたるやうにてたゝ女とちおはして人ひとりの御けはひなりけりとみゆ女御のきみもわたり給てもろともにみたてまつりあつかひたまふたゝにもおはしまさて物のけなといとおそろしきをはやくまいりたまひねとくるしき御心地にもきこえ給わか宮のいとうつくしうておはしますをみたてまつり給てもいみじくなき給てをとなひたまはむをえみたてまつらすなりなむことわすれ給なんかしとの給へは女御せきあへすかなしとおほしたりゆゝしくかなおほしそさりともしけしうはものし給はし心によりなん人はともかくもあるをきてひろきうつは物にはさいはひもそれにしたかひせはき心ある人はさるへきにたかきみとなりてもゆたかにゆるへるかたはをくれきうなる人はひさしくつねならす心ぬるくなたらかなる人はなかきためしなむおほかりけるなど仏神にもこの御心はせのありかたくつみかろきさまを申あきらめさせたまふみす法のあさりたちよるなとにてもちかくさふらふかきりのやむことなきそうなどもいとかくおほしまとへる御けはひをきくにいとみしく心くるしければ心をおこしていのりきこゆすこしよろしきさまにみえ給時五六日うちませつゝ、又をよりわつらひ給こといつとなくて月日をへ給は猶いかにおはすへきにかよかるましき御心ちにやとおほしなく御物のけなといひていくるもなしなやみたまふさまそこはかとみえすたゝひにそへてよはり給さまにのみゝゆれはいともくかなしくいみしくおほすに御心のいとまもなけなりまことや衛門督は中納言になりにかかしいまの御世にはいとしたしくおほされていと時の人也身のおほえまさるにつけても思ふことのかなはぬうれはしさを思ひわひてこの宮の御あねの二宮をなむえたてまつりてける下らうのかういはらにおはしましければ心やすきかたましりて思ひきこえ給へり人からもなへての人におもひなすらふれはけはひこよなくおはすれともとりしみにしかたこそなをふかゝりけなくさめかたきをはすてにて人めにとかめらるましきはかりにもてなしきこえ給へりなをかのしたの心わすられす侍従といふかたらひ人は宮の御侍従のめとのむすめなりけりそのめとのあねそかのかんの君の御めのとなりければゝやくよりけちかくきゝたてまつ

りてまた宮をさなくおはしまし、時よりいときよらになむおはしますみかとの
かしつきたてまつりたまふさまなどきゝをきたてまつりてかゝるおもひもつき
そめたるなりけりかくて院もはなれおはしますほと人めすくなくしめやかなら
むをおしはかりてこしゝうをむかへとりつゝいみしうかたらふむかしよりかく
いのちもたふましく思ふことをかゝるしたしきよすかありて御ありさまをきゝ
つたへたえぬ心のほとをきこしめさせてたのもしきにさらにそのしるしのな
ければいみしくなんつらき院のうへたにかくあまたにかけくしくて人におさ
れ給やうにてひとりおほとのもるよなくおほくつれくにてすくし給なり
など人のそうしけるついでにもすこしくいおほしたる御けしきにておなしくは
たゝ人の心やすきうしろみをさためむにはまめやかにつかうまつるへき人をこ
そさたむへかりけれとのたまはせて女二の宮の中くうしろやすくゆくすゑな
かきさまにてもなし給なる事とのたまはせけるをつたへきゝしにいとおしくも
くちおしくもいかゝ思みたるゝけにおなし御すちとはたつねきこえしかとそれ
はそれとこそおほゆるわさなりけれとうちうめき給へはこしゝういてあなおほ
けなそれをそれとさしをきたてまつり給て又いかやうにかきりなき御心ならむ
といへはうちほゝゑみてきこそはありけれ宮にかたしけなくきこえさせをよひ
けるさまは院にも内にもきこしめしけりなとてかはさてもさふらはさらましと
なむことのついでにはのたまはせけるいてやたゝいますこしの御いたはりあら
ましかはなといへはいとかたき御事也や御すくせとかいふこと侍なるをもとに
てかの院の事にいてゝねんころにきこえ給ふにたちならひさまたけきこえさせ
給へき御身のおほえとやおほされしこのころこそすこし物くしく御その色も
ふかくなり給へれといへはいふかひなくはやりかなるくちこはさにえいひはて
給はていまはよしすきにしかたをはきこえしやたゝかくありかたきものゝひま
にけちかきほとにてこの心のうちに思ふことのはしすこしきこえさせつへくた
はかり給へおほけなき心はすへてよしみ給へいとおそろしければ思ひはなれて
侍りとのたまへはこれよりおほけなき心はいかゝはあらむいとむくつけき事を
もおほしよりけるかなゝにしにまいりつらむとはちふくいてあなきゝにくあま
りこちたくものをこそいひなし給へけれ世はいとさためなきものを女御きさき
もあるやうありてものしたまふたくひなくやはましてその御ありさまよおもへ
はいとたくひなくめてたけれとうちくは心やましきこともおほかるらむ院の
あまたの御中に又ならひなきやうにならはしきこえ給ひしにさしもひとしから
ぬきはの御方くゝにたちましりめさましけなることもありぬへくこそいとよく

き、侍りや世中はいとつねなき物をひときはに思ひさためてはしたなくつき、
りなる事なのたまひそよとのたまへは人におとされ給へる御ありさまとめて
たき方にあらため給へきにやは侍らむこれは世のつねの御ありさまにも侍らさ
めりた、御うしろみなくてた、よはしくおはしまさむよりはおやさまにとゆつ
りきこえ給しかはかたみにさこそ思ひかはしきこえさせ給ためれあいなき御お
としめことになむとはてくははらたつをよろつにいひこしらへてまことはさ
はかりよになき御ありさまをみたてまつりなれ給へる御心にかすにもあらずあ
やしきなれすかたをうちとけて御覽せられんとはさらに思ひかけぬ事なりた、
ひとこともこのしにてきこえしらす許はなにはかりの御身のやつれにかはあら
む仏神にも思ふ事申すはつみあるわさかはいみしきちかことをしつ、のたま
へはしはしこそいとあるましきことにいひかへしけれ物ふか、らぬわか人は人
のかく身にかへていみしく思ひのたまふをえいなひはて、もしさりぬへきひま
あらはたはかり侍らむ院のおはしまさぬ夜はみ帳のめぐりに人おほくさふらふ
ておましのほとりにさるへき人かならずさふらひ給へはいかなるおりをかひ
まをみつけ侍へるへからむとわひつ、まいりぬいかにくとひ、にせめられこ
うしてさるへきおりうか、ひつけてせうそこしおこせたりよろこひなからいみ
しくやつれしのひておはしぬまことにわかこ、ろにもいとけしからぬことなれ
はけちかくなかく、おもひみたる、こともまさるへきことまては思ひもよらす
た、いとほのかに御そのつまはかりをみたてまつりし春のゆふへのあかす世と
、もに思ひいてられ給御ありさまをすこしけちかくてみたてまつりおもふこと
をもきこえしらせてはひとくたりの御かへりなともやみせたまふあはれとやお
ほししると思ひける四月十よ日はかりの事也みそきあすとて齋院にたてまつ
り給女房十二人ことに上らうにはあらぬわかき人わらへなとをのかし、ものぬ
ひけさうなとしつ、ものみむと思ひまうくるもとりく、にいとまなけにて御前
のかたしめやかにて人しけからぬおりなりけりちかくさふらふあせちのきみも
時ゝかよふ源中将せめてよひいたさせければおりたるまにた、このし、うはか
りちかくはさふらふなりけりよきおりとおもひてやをらみ帳のひんかしおもて
のおましのはしにすゑつさまでもあるへきことなりやは宮はなに心もなくおほ
とのこもりにけるをちかくおとこのけはひのすれは院のおはするとおほしたる
にうちかしこまりたるけしきみせてゆかのしもにいたきおろしたてまつるにも
のにをそはる、かとせめてみあけ給へればあらぬ人なりけりあやしき、もし
らぬこと、もをそきこゆるやあさましくむくつけくなりて人めせとちかくもさ

ふらはねはき、つけてまいるもなしわな、き給さま水のやうにあせもなかれて
ものもおほえ給はぬけしきいとあはれにらうたけ也かすならねといとかうしも
おほしめさるへき身とは思給へられすなむ、かしよりおほけなき心の侍しをひ
たふるにこめてやみ侍なましかは心のうちにくたしてすきぬへかりけるを中
くもらしきこえさせて院にもきこしめされにしをこよなくもてはなれてもの
たまはせさりけるにたのみをかけそめ侍て身のかすならぬひときはに人よりふ
かき心さしをむなしくなし侍ぬること、うこかし侍にし心なむよろついまはか
ひなきこと、思給へかへせといかはかりしみ侍にけるにかとし月にそへてくち
おしくもつらくもむくつけくもあはれにも色く、にふかく思給へまさるにせき
かねてかくおほけなきさまを御らむせられぬるもかつはいと思ひやりなくはつ
かしければつみをもき心もさらに侍るましといひもてゆくにこの人なりけりと
おほすにいとめさましくおそろしくてつゆいらへもし給はすいとはりなれ
と世にためしなきことにも侍らぬをめつらかなさけなき御心はへならはいと
心うくて中くひたふる心もこそつき侍れあはれとたにのたまはせはそれをう
けたまはりてまかてなむとよろつにきこえ給よその思ひやりはいつくしく物な
れてみえたてまつらむ事もはつかしくおしはかられ給にた、か許おもひつめた
るかたはしきこえしらせてなかくかけくしき事はなくてやみなんとおもひ
しかといときはかりけたかうはつかしけにはあらてなつかしくらうたけにやは
くとのみ、えたまふ御けはひのあてにしみしくおほゆることそ人に、させ給
はさりけるさかしく思ひしつむる心もうせていつちもくゝゐてかくしたてまつ
りてわか身もよにふるさまならすあとたえてやみなはやとまで思みたれぬた、
いさ、かまところむともなきゆめにこの手ならし、ねこのいとらうたけにうちな
きてきたるをこの宮にたてまつらむとてわかあてきたるとおほしきをなにしに
たてまつりつらむと思ふほとにおとろきていかにみえつるならむと思ふ宮はい
とあさましくうつ、ともおほえ給はぬにむねふたかりておほしをほほる、を猶
かくのかれぬ御すくせのあさからさりけるとおもほしなせみつからの心なから
もうつし心にはあらすなむおほえ侍かのおほえなかりしみすのつまをねこのつ
なひきたりしゆふへのこときこえいたりけにさはたありけむよとくちおし
く契心うき御みなりけり院にもいまはいかてかはみえたてまつらむとかなしく
心ほそくていとをさなけになきたまふをいとかたしけなくあはれとみたてまつ
りて人の御涙をさへのこふそてはいと、つゆけさのみまさるあけゆくけしきな
るにいてむかたなく中く也いか、はし侍へきいみしくにくませ給へは又きこ

えさせむ事もありかたきをたゝひとこと御こゑをきかせ給へとよろつにきこえ
なやますもうるさくわひしくて物のさらにいはれたまはねははてくはむくつ
けくこそなり侍ぬれまたかゝるやうはあらしとうしとおもひきこえてさら
はふようなめり身をいたつらにやはなしはてぬいとすてかたきによりてこそか
くまでも侍れこよひにかきり侍なむもいみしくなむつゆにても御心ゆるしたま
ふさまなどはそれにかへつるにてもすて侍なましとてかきいたきていつるには
てはいかにしつるそとあきれておほさるすみのまの屏風をひきひろけてとをゝ
しあけたれはわたとのゝみなみのとのよへいりしかまたあきながらあるにまた
あけくれのほとなるへしほのかにもみたてまつらむの心あれはかうしをやをら
ひきあけてかういとつらき御心にうつし心もうせ侍ぬすこしおもひのとめよと
おほされはあはれとたにのたまはせよとをしきこゆるをいとめつらか也とお
ほしてものもいはむとおほせとわなゝかれていとわかしくしき御さま也たゝあ
けにあけゆくにいと心あはたゝしくてあはれなるゆめかたりもきこえさすへき
をかくにくませ給へはこそさりともしまおほしあはする事も侍りなむとてのと
かならずたちいつるあけくれ秋のそらよりも心つくし也

おきてゆく空もしられぬあけくれにいつくの露のかゝる袖なりとひきいて

ゝうれへきこゆれはいてなむとするにすこしなくさめ給て

あけくれの空にうきみはきえなゝん夢なりけりとみてもやむへくとはかな

けにのたまふこゑのわかくおかしけなるをきゝさすやうにていてぬるたましひ
はまことに身をはなれてとまりぬる心ちす女宮の御もとにもまうてたまはて大
殿へそしのひておはしぬるうちふしたれとめもあはすみつるゆめのさたかにあ
はむこともかたきをさへ思ふにかのねこのありしさまいとこひしくおもひいて
らるさてもいみしきあやまちしつる身かな世にあらむことこそまはゆくなりぬ
れとおそろしくそらはつかしき心ちしてありきなともし給はす女の御ためはさ
らにもいはすわか心ちにもいとあるましきことゝいふ中にもむくつけくおほゆ
れはおもひのまゝにもえまきれありかすみかとの御めをもとりあやまちてこと
のきこえあらむにかはかりおほえむことゆへは身のいたつらにならむくるしく
もおほゆまししかいちしるきつみにはあたらすともこの院にめをそはめられた
てまつらむ事はいとおそろしくはつかしくおほゆかきりなき女ときこゆれとす
こしよつきたる心はえましりうはへはゆへありこめかしきにもしたかはぬした
の心そひたるこそとあることかゝることにうちなひき心かはし給たくひもあり
けれこれはふかき心もおはせねとひたおもむきにものおちし給へる御心にたゝ

いましも人のみきゝつけたらむやうにまはゆくはつかしくおほさるればあかき
所にたにえゐさりいてたまはすいとくちおしき身なりけりとみつからおほしゝ
るへしなやましけになむとありければおとゝきゝ給ていみしく御心をつくし給
御事にうちそへて又いかにとおとろかせ給てわたり給へりそこはかとくるしけ
なることもみえ給はすいといたくはちらひしめりてさやかにもみあはせてま
つり給はぬをいとひさしくなりぬるたえまをうらめしくおほすにやといとおし
くてかの御心ちのさまなときこえ給ていまはのとちめにもこそあれいまさらに
をろかなるさまをみえをかれしとてなんいはけなかりしほとよりあつかひそめ
てみはなちかたければかう月ころよろつをしらぬさまにすくし侍にこそをのつ
からこのほとすきはみなをし給てむなときこえ給かくけしきもしり給はぬもい
とおしく心くるしくおほされて宮は人しれすなみたくましくおほさるかむのき
みはまして中ゝなる心ちのみまさりておきふしあかしくらしわひたまふまつ
りのひなとは物見にあらそひゆくきむたちかきつれていひそゝのかせとなや
ましけにもてなしてなかめふしたまへり女宮をはかしこまりをきたるさまにも
てなしきこえておさゝうちとけてもみえたてまつり給はすわか方にはなれぬ
ていとつれゝに心ほそくなかめゐたまへるにわらはへのもたるあふひをみた
まひて

くやくしくそつみをかしけるあふひ草神のゆるせるかさしならぬにとおもふ
もいと中ゝなり世中しつかならぬくるまのをとなとをよその事にきゝて人や
りならぬつれゝにくらしかたくおほゆ女宮もかゝるけしきのすさましけさも
みしられ給へはなにことゝはしり給はねとはつかしくめさましきにものおもは
しくそおほされける女房なども物見にみないてゝ人すくなにのとやかなれはう
ちなかめてさうのことなつかしくひきまさくりておはするけはひもさすかにあ
てになまめかしけれとおなしくはいまひときはをよはさりけるすくせよと猶お
ほゆ

もろかつらおち葉をなにゝひろひけむ名はむつましきかさしなれともとか
きすさひゐたるいとなめけなるしりう事なりかしおとゝの君はまれゝわたり
給てえふともたちかへり給はすしつ心なくおほさるゝにたえいり給ひぬとて人
まいりたればさらになにもおほしわかれす御心もくれてわたり給ふみちの
程の心もとなきにけにかの院はほとりのおほちまて人たちはきたりとゝう
ちなきのゝしるけはひいとまかゝしわれにもあらていり給へれば日ころはい
さゝかひまみえたまへるをにはかになんかくおはしますとてさふらふかきり我

もをくれたてまつらしとまとふさまともかきりなしみす法とものたんこほちそ
うなどもさるへきかきりこそまかてねほろ／＼とさはくをみたまふにさらはか
きりにこそはとおほしはへるあさましきになにことかはたくひあらむさりと
物のけのするにこそあらめいとかくひたふるになさはきそとしつめたまひてい
よく／＼いみしき願ともをたてそへさせ給すくれたるけんさとものかきりめしあ
つめてかきりある御いのちにてこの世つきたまひぬともたゝいましはしのとめ
たまへ不動尊の御本のちかひありその日かすをたにかけとゝめたてまつりたま
へとかしらよりまことにくろけふりをたてゝいみしき心をゝこしてかちしたて
まつる院もたゝいまひとたひめをみあはせ給へいとあへなくかきりなりつらむ
ほどをたにえみすなりにけることのくやし／＼かなしきをとおほしまとへるさま
とまり給へきにもあらぬをみたてまつる心地ともたゝおしはかるへしいみしき
御心の内を仏もみたてまつり給にや月ころさらにあらはれてこぬものゝけち
いさきわらはにうつりてよはひのゝしるほとにやう／＼いきいて給にうれしく
もゆゝしくもおほしさはかるいみしくてうせられて人はみなさりねるむひとゝ
ころの御みゝにきこえむをのれを月ころてうしわひさせ給かなさけなくつらけ
れはおなしはおほししらせむとおもひつれとさすかにいのちもたふましく身
をくたぎておほしまとふをみたてまつれはいまこそかくいみしき身をうけたれ
いにしへの心のゝこりてこそかくまでもまいりきたるなれば物の心くるしさを
えみすくさてつゐにあらはれぬることさらにしられしと思つる物をとてかみを
ふりかけてなくけはひたゝかのむかしみ給しものゝけのさまとみえたりあさま
しくむくつけしとおほししみにしことのかはらぬもゆゝしければこのわらはの
てをとらへてひきすへてさまあしくもせさせ給はすまことにその人かよからぬ
きつねなといふなる物のたふれたるかなき人のおもてふせなることいひいつる
もあなるをたしかなるなのりせよ又人のしらさらむことの心にしるく思ひいて
られぬへからむをいへさてなむいさゝかにてもしむすへきとのたまへはほろ
／＼といたくなきて

わか身こそあらぬさまなれそれなから空おほれするきみは君也いとつらし
／＼となきさけふものからさすかにものはちしたるけはひかはらす中／＼いと
うとましく心うければ物はせしとおほす中宮の御事にてもいとうれしくかた
しけなしとなんあまかけりてもみたてまつれと道ことになりぬれはこのうへま
てもふかくおほえぬにやあらむなをみつからつらしと思ひきこえし心のしふな
むとまるものなりけるそのなかにもいきてのよに人よりおとしておほしすてし

よりも思ふとちの御物かたりのついでに心よからすにくかりしありさまをのたまひいてたりしなむいとうらめしくいまはたゝなきにおほしゆるしてこと人のいひおとしめむをたにはふきかくし給へところそ思へとうち思しはかりにかくいみしき身のけはひなれはかくところせきなりこの人をふかくにくしと思きこゆることはなけれとまもりつよくいと御あたりとをき心ちしてえちかつきまいらす御こゑをたにほのかになむきゝ侍るよしいまはこのつみのかるむはかりのわさをせさせ給へす法と経とのゝしる事も身にはくるしくわひしきほのほとのみまつはれてさらにたうときこともきこえねはいとかなしくなむ中宮にもこのよしをつたへきこえ給へゆめ宮つかへのほとに人ときしろひそねむ心つかひたまふな斎宮におはしましゝころほひの御つみかるむへからむくどくの事をかならずせさせ給へいとくやしきことになむありけるなといひつゝくれとものゝけにむかひてものかたりし給はむもかたはらいたければふむしこめてうへをは又こと方にしのひてわたしたてまつり給かくうせ給にけりといふこと世の中にみちて御とふらひにきこえ給人ゝあるをいとゆゝしくおほすけふのかへさみにいて給ひけるかむたちめなどかへり給みちにかく人の申せはいといみしきことにもあるかないけるかひありつるさいはひ人のひかりうしなふ日にてあめはそほふるなりけりとうちつけ事し給人もあり又かくたらひぬる人はかならずえなからぬ事なりなにをさくらにといふふる事もあるはかゝる人のいとゝ世になからへて世のたのしひをつくさはかたはらの人くるしからむいまこそ二品宮はもと

の御おほえあらはれ給はめいとおしけにおされたりつる御おほえをなうちさゝめきけり衛門督きのふくらしかたかりしを思ひてけふは御おとうとも左大弁藤宰相などおくの方にのせてみ給けりかくいひあへるをきくにもむねうちつふれてなにかうき世にひさしかるへきとうちすしひとりこちてかの院へみなま

いり給たしかならぬことなれはゆゝしくやとてたゝおほかたの御とふらひにま

いり給へるにかく人のなきさはけはまことなりけりとたちさはき給へり式部卿宮もわたり給ていといたくおほしほれたるさまにてそいり給人の御せうそこも

え申つたへたまはす大将の君なみたをのこひてたちいて給へるにいかにくゝゆゝしきさまに人の申つればしんしかたき事にてなむたゝひさしき御なやみをう

けたまはりなきてまいりつるなどのたまふいとをもくなりて月日へたまへる

をこの暁よりたえいり給へりつるを物のけのしたるになむありけるやうやういきいて給やうにきゝなし侍ていまなむみな人心しつむめれとまたいとたのもし

けなしや心くるしき事にこそとてまことにいたくなき給へるけしき也めもすこ

しはれたり衛門督わかあやしき心ならひにやこの君のいとさしもしたしからぬ
まゝはゝの御ことをいたく心しめたまへるかなとめをとゝむかくこれかれまい
り給へるよしきこしめしてをもきひやうさのにはかにとちめつるさまなりつる
を女房などは心もおさめすみたりかはしくさはき侍けるに身つからもえのと
めす心あはたゝしき程にてなむことさらになむかくものし給へるよろこひはき
こゆへきとのたまへりかむのきみはむねつふれてかゝるおりのらうろうならす
はえまいるましくけはひはつかしく思ふも心の内そはらきたなかりけるかくい
きいて給てのゝちしもおそろしくおほして又ゝいみしき法ともをつくしてくは
へをこなはせ給うつし人にてたにむくつけかりし人の御けはひのまして世かは
りあやしきものゝさまになりたまへらむをおほしやるにいと心うければ中宮を
あつかひきこえ給さへそのおりはものうくいひもてゆけは女の身はみなおな
しつみふかきもとゐそかしとなへての世中いとはしくかの又ひとときかさりし
御中のむつものかたりにすこしかたりにて給へりしことをいひいたりしにま
ことゝおほしいつるにいとわつらはしくおほさる御くしおろしてむとせちにお
ほしたれはいむ事のちからもやとて御いたゝきしるし許はさみて五かい許うけ
させたてまつり給御かいの師いむことのすぐれたるよし仏に申すにもあはれに
たうときことまじりて人わるく御かたはらにそひゐてなみたおしのこひ給ひつ
ゝ仏をもろ心にねむしきこえ給さま世にかしこくおはする人もいとかく御心ま
とふことにあたりてはえしつめたまはぬわさなりけりいかなるわさをしてこれ
をすくひかけとゝめたてまつらむとのみよるひるおほしなけくほれゝしき
まで御かほもすこしおもやせ給にたり五月などはましてはれゝしからぬそら
のけしきにえさはやきたまはねとありしよりはすこしよろしきさまなりされと
なをたえすなやみわたり給ものゝけのつみすくふへきわさひことに法花經一部
つゝくやうせさせ給日ことになにくれとたうときわさせさせ給御まくらかみち
かくてもふたんのみと経こゑたうときかきりしてよませ給あらはれそめてはお
りゝかなしけなることゝもをいへとさらにこのものゝけさりはてすいとゝあ
つき程はいきもたえつゝいよゝのみよりは給へはいはむかたなくおほしなけ
きたりなきやうなる御心ちにもかゝる御けしきを心くるしくみたてまつり給て
世中になくなりなんもわか身にはさらにくちおしきことのこるましかれとかく
おほしまとふめるにむなしくみなされたてまつらむかいと思ひくまなかるへけ
れはおもひおこして御ゆなといさゝかまいるけにや六月になりてそ時ゝ御く
しもたけ給けるめつらしくみたてまつり給にも猶いとゆゝしくて六条院にはあ

からさまにもえわたり給はすひめ宮はあやしかりしことをおほしなけしより
やかてれいのさまにもおはせすなやましくし給へとおとろくしくはあらすた
ちぬる月より物きこしめさていたくあをみそこなはれ給かの人はわりなく思ひ
あまる時くは夢のやうにみたてまつりけれと宮つきせすわりなき事におほし
たり院をいみしくをちきこえ給へる御心にありさまも人の程もひとしくたにや
はあるいたくよしめきなまめきたれはおほかたの人めにこそなへての人にはま
さりてめてらるれおさなくよりさるたくひなき御ありさまにならひたまへる御
心にはめさましくのみみ給ほとにかなやみわたり給はあはれなる御すくせに
そありける御めのとたちみたてまつりとかめて院のわたらせ給こともいとたま
さかなるをつふやきうらみたてまつるかなやみ給ときこしめしてそわたり給
女きみはあつくむつかしとて御くしすましてすこしさはやかにもてなし給へり
ふしなからうちやり給へりしかはとみにもかはかねとつゆはかりうちふくみま
よふすちもなくていときよらにゆらくとしてあをみおとろへたまへるしもい
ろはさをにしろくうつくしけにすきたるやうにみゆる御はたつきなとよになく
らうたけ也もぬけたるむしのからなどのやうにまたいとたよはしけにおはす
としころすみ給はてすこしあれたりつる院の内たとしへなくせはけにさへみゆ
きのふけふかくものおほえたまふひまにて心ことにつくろはれたるやり水せん
さいのうちつけに心ちよけなるをみいたし給てもあはれにいまてへにけるを
おもほす池はいとすしけにてはちすの花のさきわたれるにはいとあをやか
にてつゆきらくとたまのやうにみえわたるをかれみたまへをのれひとりもす
しけなるかなとのたまふにおきあかりてみいたし給へるもいとめつらしけれ
はかくてみたてまつるこそ夢の心ちすれいみしくわか身さへかきりとおほゆる
おりくありしはやと涙をうけてのたまへは身つからもあはれにおほして
きえとまるほとやはふへきたまさかにはちすのつゆのかる許をとの給
契をかむこの世ならてもはちすはに玉あるつゆのころへたつないてたま
ふかたさまはものうけれと内にも院にもきこしめさむ所ありなやみ給ときて
もほとへぬるをめにちかきに心をまとはしつる程みたてまつる事もおさくな
かりつるにかくるくもまにさへやはたえこもらむとおほしたちてわたり給ひぬ
宮は御心のおにみえたてまつらむもはつかしうつましくおほすに物なとき
こえたまふ御いらへもきこえ給はねはひろのつもりをさすかにさりけなくて
つらしとおほしけると心くるしければとかくこしらへきこえ給をとなひたる人
めして御心ちのさまなとひ給れいのさまならぬ御心ちになむとわつらひ給御

ありさまをきこゆあやしくほとへてめつらしき御ことにもと許のたまひて御心の内にはとしころへぬる人ゑたにもさることなきを不定なる御ことにもやとおほせはことにともかくものたまひあへしらひ給はてた、うちなやみ給へるさまのいとらうたけなるをあはれとみたてまつり給からうしておほしたちてわたりたまひしかはふともえかへり給はて二三日おはするほといかにくとうしろめたくおほさるれば御ふみをのみかきつくし給いつのまにつもるおほむことのはにかあらむいてや、すからぬ世をもみるかなとわかきみの御あやまちをしらぬ人はいふ侍従そかゝるにつけてもむねうちさはきけるかの人もかくわたりたまへりときくにおほけなく心あやまりしていみしきことゝもをかきつゝけてをこせたまへりたいにあからさまにわたり給へる程に人まなりければしのひてみせたまつるむつかしき物みするこそいと心うけれ心ちのいと、あしきにとてふしたまへればなをたゝこのはしかきのいとおしけに侍そやとてひろけたれば人のまいるにいとくるしくてみ木ちやうひきよせてさりぬいとゝむねつふるゝに院いり給へはえよくもかくし給はて御しとねのしたにさはさみ給つようさりつかた二条院へわたり給はむとて御いとまきこえたまふこゝにはけしうはあらすみえ給をまたいとたゝよはしけなりしをみすてたるやうにおもはるゝもいまさらにいとおしくてなむひかゝゝしくきこえなす人ありともゆめ心をき給ないまみなおしたまひてむとかたらひ給れいはなまいはけなきたはふれことなどもうちとけきこえたまふをいたくしめりてさやかにもみあはせてまつり給はぬをたゝ世のうらめしき御けしきと心えたまふひるのおましにうちふし給て御物かたりなときこえ給ほとにくれにけりすこしおほとのもりいりにけるにひくらしのはなやかになくにおとろき給てさらはみちたとくしからぬ程にとて御そなとたてまつりなをす月まちてともいふなる物をといとわかやかなるさましでのたまふはにくからすかしそのまにもとやおほすと心くるしけにおほしてたちとまり給

夕露に袖ぬらせとやひくらしのなくをきくゝおきて行らむかたなりなる

御心にまかせていひいて給へるもらうたければつゝてあなくるしやとうちなけきたまふ

まつ里もいかゝきくらんかたゝに心さはかすひくらしのこゑなとおほし

やすらひてなをなさけなからむも心くるしければとまり給ひぬしつ心なくさすかになかめられ給いて御くた物はかりまいりなとしておほとのもりぬまたあさゝみのほとにわたり給はむとてとくおき給ふよへのかはほりをおとしてこ

れは風ぬるくこそありけれとて御あふきをき給てきのふうたゝねし給へりしお
ましのあたりをたちとまりてみ給に御しとねのすこしまよひたるつまよりあさ
みとりのうすやうなるふみのおしまきたるはしみゆるをなに心もなくひきいて
ゝ御覧するにおとこの手なりかみのかなといえむにことさらめきたるかきさ
まなりふたかさねにこまゝとかきたるをみ給にまきるへき方なくその人の手
なりけりとみ給つ御かゝみなとあけてまいらする人はみ給ふみにこそはと心も
しらぬにこしゝうみつけてきのふのふみの色とみるにいとみしくむねつふ

くゝとなる心ちす御かゆなとまいる方にめもみやすいてさりともしそれにはあ
らしいといみしくさることはありなんやかよくいたまひてけむと思ひなす宮はな
に心もなくまたおほとこのもれりあないはけなかゝる物をちらし給ひてわれな
らぬ人もみつけたらましかはとおほすも心おとりしてされはよいとむけに心に
くき所なき御ありさまをうしろめたしとはみるかしとおほすいてたまひぬれは
人ゝすこしあかれぬるにしゝうよりて昨日のものはいかゝせさせ給てしけさ院
の御らむしつるふみの色こそにて侍つれときこゆれはあさましとおほして涙の
たゝいてきにいてくれはいとおしき物からいふかひなの御さまやとみたてまつ
るいつくにかはをかせ給てし人ゝのまいりしにことありかほにちかくさふらは
しときはかりのいみをたに心のおにゝさり侍しをいらせ給しほとはすこしほと
へ侍にしをかくさせ給つらむとなむ思給へしときこゆれはいさとよみしほとに
いり給しかはふともえおきあからてさしはさみしをわすれにけりとたまふに
いときこえむかたなしよりてみれはいつくのかはあらむあないみしかの君もい
といたくおちはゝかりてけしきにてももりきかせ給事あらはとかしこまりきこ
え給しものをほとたにへすかゝることのいてまうてくるよすへていはけなき御
ありさまにて人にもみえさせ給ければとしころさはかりわすれかたくうらみい
ひわたり給しかとかくまで思ひ給へし御ことかはたか御ためにもいとおしく侍
へきことゝはゝかりもなくきこゆ心やすくわかくおはすれはなれきこえたるな
めりいらへもし給はてたゝなきにのみそなき給いとなやましけにてつゆはかり
のものもきこしめさねはくなやましくせさせ給をみきたてまつり給ていま
はをこたりはて給にたる御あつかひに心をいれ給へることゝつらく思ひいふお
とゝはこのふみのなをあやしくおほさるれば人みぬ方にてうち返しつゝみ給さ
ふらふ人ゝの中にかの中納言の手ににたるてしてかきたるかとまておほしよ
れとこと葉つかひきらゝとまかうへくもあらぬことゝもあり年をへて思ひわ
たりけることのたまさかにほいかなひて心やすからぬすちをかきつくしたるこ

とはいと見所ありてあはれなれといとかくさやかにはかくへしやあたら人のふ
みをこそおもひやりなくかきけれおちゝることもこそと思ひしかはむかしかや
うにこまかなるへきおりふしにもことそきつゝこそかきまきはしゝか人のふ
かきようゐはかたきわさなりけりとかの人の心をさへみおとし給つさてもこの
人をはいかゝもてなしきこゆへきめつらしきさまの御心ちもかゝることのまき
れにてなりけりいてあな心うやかく人つてならすうきことをしるゝありしな
からみたてまつらむよとわか御心なからもえ思ひなをすましくおほゆるを猶さ
りのすさひとはしめより心をとゝめぬ人たに又ことさまの心わくらむと思ふは
心月なく思ひへたてらるゝをましてこれはさまことにおほけなき人の心にもあ
りけるかなみかとの御めをもあやまつたくひむかしもありけれどそれは又いふ
かたこと也宮つかへといひてわれも人もおなし君になれつかうまつるほどにを
のつからさるへき方につけても心をはしそめものゝまきれおほかりぬへきわ
さ也女御かういといへとあるすちかゝるかたにつけてかたほなる人もあり心
はせかならすをからぬうちましりておもはすなる事もあれとおほろけのさた
かなるあやまちみえぬ程はさてもましらふやうもあらむにふとしもあらはなら
ぬまきれありぬへしかくはかり又なきさまにもてなしきこえて内ゝの心さし
ひく方よりもいつくしくかたしけなき物に思ひはくゝまむ人をゝきてかゝるこ
とはさらにたくひあらしとつまはしきせられ給みかとゝきこゆれとたゝすなほ
におほやけさまの心はへはかりにて宮つかへの程もゝのすさまじきに心さしふ
かきわたくしのねきことになひきをのかしゝあはれをつくしみすくしかたきお
りのいらへをもいひそめしねんに心かよひそむ覧なからひはおなしけしからぬ
すちなれとよるかたありやわか身なからもさはかりの人に心わけ給へくはおほ
えぬものをといと心月なけれと又けしきにいたすへきことにもあらずなどおほ
しみたるゝにつけて故院のうへもかく御心にはしろしめしてやしらすかほをつ
くらせ給ひけむ思へはその世のことこそはいとおそろしくあるまじきあやまち
なりけれとちかきためしをおほすにそ恋の山ちはえもとくましき御心ましりけ
るつれなしつくり給へとものおほしみたるゝさまのしるければ女君きえのこり
たるいとおしみにわたりたまひて人やりならす心くるしう思やりきこえ給にや
とおほして心ちはよろしくなりにて侍をかの宮のなやましけにおはすらむにと
くわたり給にしこそいとおしけれときこえ給へはさかしれいならすみえ給しか
とことなる心ちにもおはせねはをのつから心のとかに思ひてなむ内よりはたひ
ゝ御つかひありけりけふも御ふみありつとか院のいとやむことなくきこえつ

けたまへれはうへもかくおほしたるなるへしすこしをろかになともあらむはこ
なたかなたおほさむことのいとおしきそやとてうめき給へは内のきこしめさむ
よりもみつからうめしと思ひきこえ給はむこそ心くるしからめわれはおほし
とかめすともよからぬさまにきこえなす人々かならずあらむと思へはいとくる
しくなむなどのたまへはけにあなかに思ふ人のためにはわつらはしきよすか
なければよろつにたとりふかきことゝやかくやとおほよそ人のおもはむ心さへ
思ひめくらさるゝをこれはたゝこくわうの御心やをき給はむとはかりをはゝか
らむはあさき心ちそしけるとほゝゑみてのたまひまきはすわたり給はむこと
はもろともにかへりてを心のとかにあらむとのみきこえ給をこゝにはしはし心
やすくて侍らんまつわたり給て人の御心もなくさみなむ程にをときこえかはし
給ほとに日ころへぬひめ宮はかくわたりたまはぬ日ころのふるも人の御つらさ
にのみおほすをいまはわか御をこたりうちませてかくなりぬるとおほすに院も
きこしめしつけていかにおほしめさむと世中つゝましくなむかの人もいみしけ
にのみいひわたれともこしゝうもわつらはしく思ひなけてかゝることなむあ
りしとつけてければいとあさましくいつのほどにさる事いてきけむかゝること
はありふれはをのつからけしきにてももりいつるやうもやとおもひしたにいと
つゝましくそらにめつきたるやうにおほえしをましてさはかりたかふへくもあ
らさりしことゝもをみ給てけむはつかしくかたしけなくかたはらいたきにあさ
ゆふすゝみもなきころなれと身もしむる心ちしていはむかたなくおほゆとしこ
ろまめことにもあたことにもめしまつはしまいりなれつる物を人よりはこまか
におほしとゝめたる御けしきのあはれになつかしきをあさましくおほけなき物
に心をかたてまつりてはいかてかはめをもみあはせてまつらむさりとてか
きたえほのめきまいらさらむも人めあやしくかの御心にもおほしあはせむこと
のいみしきなとやすからす思ふに心ちもいとなやましくて内へもまいらすさし
てをもぎつみにはあたるへきならねと身のいたつらになりぬる心ちすればされ
はよとかつはわか心もいとらくおほゆいてやしつやかに心にくきけはひみえ
給はぬわたりそやまつはかのみすのはさまもさるへきことかはかるくしと大
将のおもひ給へるけしきみえきかしなといまぞ思ひあはするしゐてこのことを
思ひさまさむとおもふ方にてあなかなになむつけたてまつらまほしきにやあら
むよきやうとてもあまりひたおもむきにおほとかにあてなる人は世のありさま
もしらすかつさふらふ人に心をき給こともなくてかくいとおしき御身のためも
人のためもいみしきことにもあるかなとかの御ことの心くるしさもえ思ひはな

たれ給はす宮はいとらうたけにてなやみわたり給さまのなをいと心くるしくかく思ひはなちたまふにつけてはあやにくにうきにまきれぬこひしさのくるしくおほさるれはわたり給てみたてまつり給につけてもむねいたくいとおしくおほさる御いのりなとさまく／＼にせさせ給おほかたのことはありしにかはらすなか／＼いたはしくやむことなくもてなしきこゆるさまをまし給けちかくうちかたらひきこえ給さまはいとこよなく御心へたゝりてかたはらいたければ人めはかりをめやすくもてなしておほしのみみたるゝにこの御心の内しもそくるしかりけるさることみきともあらはしきこえ給はぬにみつからいとわりなくおほしたるさまも心をさなしいとかくおはするけそかしよきやうといひなからあまり心もとなくをくれたるたのもしけなきわさなりとおほすに世中なへてうしろめたく女御のあまりやはらかにをひれたまへるこそかやうに心かけきこえむ人はまして心みたれなむかし女はかうはるけ所なくなよひたるを人もあなつらはしきにやさるましきにふとめとまり心つよからぬあやまちはしいつるなりけりとおほす右のおとゝの北の方のとりたてたるうしろみもなくおさなくよりものはかなき世にさすらふるやうにておいゝて給けれとかとく／＼しくらうありて我もおほかたにはおやめきしかとにくき心のそはぬにしもあらさりしをなたらかにつれなくもてなしてすくしこのおとゝのさるむしんの女房に心あはせていききたりけんにもけさやかにもてはなれたるさまを人にもみえしられことさらにゆるされたるありさまにしなしてわか心とつみあるにはなさすなりにしなといまおもへはいかにかとあることなりけり契ふかき中なりければなくかくてたもたむことはとてもかくてもおなしことあらまし物から心もてありしことゝも世人もおもひいてはすこしかるく／＼しき思ひくはゝりなましいといたくもてなしてしわざなりとおほしいつ二条の内侍のかむのきみをは猶たえす思ひいてきこえ給へとかくうしろめたきすちのことうき物におほしゝりてかの御心よはさもすこしかるく思ひなされ給けりつゐに御ほいの事し給てけりときゝ給てはいとあはれにくちおしく御心うこきてまつとふらひきこえ給いまなむとたににほはし給はさりけるつらさをあさからすきこえたまふ

あまの世をよそにきかめやすまの浦にもしほたれしもたれならなくにさま

く／＼なる世のさためなさを心におもひつめていまゝてをくれきこえぬるくちおしさをおほしすてつともさりかたき御系かうのうちにはまつこそはとあはれになむなどおほくきこえ給へりとくおほしたちにしことなれとこの御さまたけにかゝつらひて人にはしかあらはし給はぬことなれと心の内あはれにむかしより

つらき御契をさすかにあさくしもおほししられぬなど方／＼におほしいてらる御返いまはかくしもかよふましき御ふみのとちめとおほせはあはれにて心とゝめてかき給すみつきなといとおかしつねなき世とは身ひとつのみしり侍にしをゝくれぬとのたまはせたるになむけに

あま舟にいかゝは思ひをくれけんあかしのうらにいさりせしきみゑかうにはあまねきかともいいかゝはとありきあをにひのかみにてしきみにさしたまへはれいの事なれといたくすくしたるふてつかひなをふりかたくおかしけなり二条院におはします程にて女君にもいまはむけにたえぬる事にてみせたてまつり給いといたくこそはつかしめられたれけに心月なしやさま／＼心ほそき世中のありさまをよくみすくしつるやうなるよなへての世のことにてもはかなく物をいひかはし時／＼によせてあはれをもしりゆへをもすくさすよそなからのむつひかはしつへき人は齋院とこの君とこそはのこりありつるをかくみなそむきはてて齋院はたいみしうつとめてまきれなくをこなひにしみ給にたなりなをこゝらの人のありさまをきゝみる中にふかく思ふさまにさすかになつかしきことのかの人の御なすらひにたにもあらさりけるかな女こをおほしたてむことよいとかたかるへきわさ也けりすくせなといふらむものはめにみえぬわさにておやの心にまかせかたしおいたゝむ程の心つかひはなをちからいるへかめりよくこそあまた方／＼に心をみたるましき契なりけれ年ふかくいらさりしほとはさう／＼しのわさやさま／＼にみましかはとなむなけかしきおり／＼ありしわか宮を心しておほしたてまつり給へ女御は物の心をふかくしりたまふほとならてかくいとまなきましらひをし給へはなに事も心もとなき方にそのし給覧みこたちなむなをあくかきり人にてむつかるましくて世をのとかにすくし給はむにうしろめたかるましき心はせつけまほしきわさなりけるかきりありてとさまかうさまのうしろみまうくるたゝ人はをのつからそれにもたすけられぬるをなときこえ給へははか／＼しきさまの御うしろみならずとも世になからへんかきりはみたてまつらぬやうあらしと思ふをいかならむとて猶物を心ほそけにてかく心にまかせてをこなひをもとゝこほりなくしたまふ人ゝをうらやましく思ひきこえたまへりかむの君にさまかはりたまへらむさうそくなとまたゝちなれぬほととはとふらふへきをけさなどはいかにぬふ物そゝれせさせ給へひとくたりは六条のひむかしの君にものしつけむうるはしき法ふくたちてはうたてみめもけうとかるへしさすかにその心はへみせてをなときこえ給あをにひのひとくたりをこゝにはせさせ給つくも所の人めしてしのひてあまの御くどものさるへき

はしめのたまはす御しとねうわむしろ屏風木長などの事もいとしのひてわさとかましくいそかせ給けりかくて山のみかとの御賀ものひて秋とありしを八月は
大将の御忌月にてかくそのことをこなひ給はむにひんなかるへし九月は院のお
ほきさきのかくれ給にし月なれば十月にとおほしまうくるをひめ宮いたくなや
み給へは又のひぬ衛門督の御あつかりの宮なむその月にはまいり給けるおほき
おとゝゐたちていかめしくこまかにものゝきよらきしきをつくし給へりけりか
むの君もそのついでにそ思ひおこしてたまひけるなをなやましくれいなら
すやまひつきてのみすくし給宮もうちはへてもものをつゝましくいとおしとのみ
おほしなけくけにやあらむ月おほくかさなり給まゝにいとくるしけにおはしま
せは院は心うしと思ひきこえ給かたこそあれいとらうたけにあえかなるさまし
てかくなやみわたり給をいかにおはせむとなけかくてさまゝにおほしなけ
く御いのりなことしはまきれおほくてすくし給御山にもきこしめしてらうた
くこひしとおもひきこえ給月ころかくほかゝにてわたり給事もおさゝなき
やうに人のそうしけれはいかなるにかと御むねつふれて世中もいまさらにうら
めしくおほしてたいの方のわつらひけるころはなをそのあつかひにときこしめ
してたになまやすからさりしをそのゝちなをりかたくものし給らむはそのこ
ろほひひむなき事やいてきたりけむみつからしりたまふことならねとよからぬ御
うしろみもの心にていかなる事かありけむうちわたりなどのみやひをかはす
へきなからひなどにもけしからすうきこといひいつるたくひもきこゆかしとき
へおほしよるもこまやかなる事おほしすてゝし世なれとなをこのみちははなれ
かたくて宮に御ふみこまやかにてありけるをおとゝおはしますほとにてみ給そ
のことゝなくてしはゝもきこえぬほとにおほつかなくてのみとし月のすくる
なむあはれなりけるなやみ給なるさまはくはしくきゝしのちねんすのついでに
も思ひやらるゝはいかゝ世中さひしくおもはすなることありともしのひすくし
給へうらめしけなるけしきなどおほろけにてみしりかほにほめかすいとしな
をくれたるわさになむなどをしへきこえ給へりいとゝおしく心くるしくかゝ
る内ゝのあさましきをはきこしめすへきにはあらてわかをこたりにほいなく
のみきゝおほすらんことをとはかりおほしつゝけてこの御返をはいかゝきこえ
給心くるしき御せうせにまろこそいとくるしけれおもはすに思ひきこゆるこ
とありともおろかに人のみとかむはかりはあらしとこそおもひ侍れたかきこえ
たるにかあらむとのたまふにはちらひてそむきたまへる御すかたもいとらうた
け也いたくおもやせてものおもひくしたまへるいとゝあてにおかしいとをさな

き御心はへをみをき給ていたくはうしろめたかりきこえたまふなりけりと思ひ
あはせてまつれはいまよりのちもよろつになむかうまでもいかてきこえしと
おもへとうへの御心にそむくときこしめす覧ことのやすからすいふせきをこゝ
にたにきこえしらせてやはとてなむいたりすくなくたゝ人のきこえなす方にの
みよるへかめる御心にはたゝをろかにあさきとのみおほし又いまはこよなくさ
たすきにたるありさまもあなつらはしくめなれてのみゝなし給らむもかたゝ
にくちおしくもうれたくもおほゆるを院のおはしまさむほとはなを心をさめて
かのおほしをきてたるやうありけむさたすき人をもおなしくなすらへきこえて
いたくなかるめたまひそいにしへよりほいふかきみちにもたとりうすかるへき
女かたにたにみなおもひをくれつゝいとぬるき事おほかるを身つからの心には
なにはかりおほしまよふへきにはあらねといまはとすて給けむ世のうしろみに
をき給へる御心はえのあはれにうれしかりしをひきつゝきあらそひきこゆるや
うにておなしさまにみすてたてまつらむことのあえなくおほされんにつゝみて
なむ心くるしとおもひし人ゝもいまはかけとゝめらるゝほたし許なるも侍らす
女御もかくてゆくすゑはしりかたけれとみこたちかすそひ給めれば身つからの
世たにのとけくはとみをきつへしそのほかはたれもゝあらむにしたかひても
ろともに身をすてむもおしかるましきよはひとになりたるをやうゝすゝ
しく思ひ侍院の御世のゝこりひさしくもおはせしいとあつしくいとゝなりまさ
り給ても心ほそけにのみおほしたるにいまさらに思はすなる御なもりきこえ
て御心みたり給なこの世はいとやすしことにもあらずのちのよの御みちのさま
たけならむもつみいとおそろしからむなとまほにそのことゝはあかし給はねと
つくゝときこえつゝけ給に涙のみおちつゝ我にもあらずおもひしみておはす
れは我もうちなきたまひて人のうへにてももとかしくきゝ思しふる人のさかし
らよ身にかはることにこそいかうたてのおきなやとむつかしくうるさき御心
そふらんとはちたまひつゝ御すゝりひきよせ給て手つからおしすりかみとりま
かなひかゝせてまつり給へと御てもわなゝきてえかき給はすかのこまかなり
し返事はいとかくしもつゝますかよはし給らむかしとおほしやるにいとにくけ
れはよろつのあはれもさめぬへけれとこと葉などをしへてかゝせてまつり給
まいり給はむ事はこの月かくてすきぬ二の宮の御いきをひことにてまいり給ひ
けるをふるめかしき御身さまにてたちならひかほならむもはゝかりある心ちし
けりしも月は身つからの忌月也としのをはりはたいとものさはかしまたいとゝ
この御すかたもみくるしくまちみ給はんをと思ひ侍れとさりとてさのみのふへ

きことにやはむつかしく物おほしみたれすあきらかにもてなし給てこのいたくおもやせ給へるつくろひ給へなといとらうたしとさすかにみたてまつりたまふ衛門督をはなにさまの事にもゆへあるへきおりふしにはかならずことさらにまつはし給つゝのたまはせあはせしをたえてさる御せうそこもなし人あやしと思ふらんとおほせとみむにつけてもいとゝほれゝしき方はつかしくみむには又わか心もたゝならすやとおほしかへされつゝやかて月ころまいり給はぬをもとかめなしおほかたの人はなをれいならすなやみわたりて院にはた御あそひとなき年なれはとのみ思ひわたるを大将の君そあるやうあることなるへしすきものはさためてわかけしきとりしことにはしのはぬにやありけむと思ひよれといとかくさたかにのこりなきさまならむとはおもひより給はさりけり十二月になりにけり十よ日とさためてまひともならしとのゝうちゆすりてのゝしる二条の院のうへはまたわたりたまはさりけるをこのしかくによりそえしつめはてゝわたり給へる女御の君もさとおはしますこのたひのみこは又おとこにてなむおはしましけるすぎゝいとおかしけにておはするをあけくれもてあそひたてまつり給になむするよはひのしるしうれしくおほされける試樂に右大臣殿のきたのかたもわたり給へり大将の君うしとらのまちにてまつうちゝにてうかくのやうにあけくれあそひならし給ければかの御方はおまへの物はみたまはす衛門督をかゝる事のおりもましらはせさらむはいとはえなくさうゝしかるへきうちに人あやしとかたふきぬへきことなれはまいり給へきよしありけるをもくわつらふよし申てまいらすさはそこはかとくるしけなるやまひにもあらさなるを思ふ心のあるにやと心くるしくおほしてとりわきて御せうそこつかはすちゝおとゝもなとかかへさひまうされけるひかゝしきやうに院にもきこしめさむをおとろゝしきやまひにもあらすたすけてまいり給へとそゝのかし給にかくかさねてのたまへはくるしとおもふゝまいりぬまたかむたちめなともつとひ給はぬほとなりけりれいのけちかきみすの内にいれ給てもやのみすおろしておはしますけにいといたくやせゝにあをみてれいもほりかにはなやきたるかたはおとうとの君たちにはもてけたれていとういありかほにしつめたるさまそことなるをいとゝしつめてさふらひたまふさまなとかはみこたちの御かたはらにさしならへたらむにさらにとかあるましきをたゝことのさまのたれもゝいと思ひやりなきこそいとつみゆるしかたけれなと御めとまれとさりけなくいとなつかしくそのことゝなくてたいめんもいとひさしくなりにけり月ころは色ゝのひやうさをみあつかひ心のいとまなきほとに院の御賀のためこゝ

にものし給みこのほうしつかうまつり給へくありしをつきくゝとゝこほること
しけてかくとしもせめつれはえ思ひのことくしあへてかたのことくなんいも
ゐの御はちまいるへきを御賀なといへはことくしきやうなれと家においゝつ
るわらはへのかすおほくなりけるを御らんせさせむとてまいなとならはしは
しめしその事をたにはたさんとて拍子とゝのへむこと又たれにかはとおもひめ
くらしかねてなむ月ころとふらひものし給はぬうらみもすてゝけるとのたまふ
御けしきのうらなきやうなるものからいとくはつかしきにかほの色たかふら
むとおほえて御いらへもとみにえきこえす月ころかたくにおほしなやむ御こ
とうけたまはりなけき侍ながら春の比をひよりれいもわつらひ侍るみたりかく
ひやうといふ物ところせくおこりわつらひ侍りてはかくしくふみたつる事も
侍らす月ころにそへてしつみ侍てなむ内などにもまいらす世中あたたえたるや
うにてこもり侍院の御よはひたりたまふ年なり人よりさたかにかそへたてまつ
りつかうまつるへきよしちしのおとゝ思ひをよひ申されしをかうふりをかけく
るまをおしますゝてゝし身にてすゝみつかうまつらむにつく所なしけに下らう
なりともおなしことふかきところ侍らむその心御覽せられよともよをしまうさ
るゝことの侍しかはをもきやまひをあひたすけてなんまいりて侍しいまはいよ
くゝいとかすかなるさまにおほしすましていかにめしき御よそひをまちうけたて
まつり給はむことねかはしくもおほすましくみたてまつり侍しをことゝもをは
そかせ給てしつかなる御物かたりのふかき御ねかひかなはせ給はむなんまさり
て侍へきと申給へはいかめしくきゝし御賀のことを女二の宮の御方さまにはい
ひなさぬもうありとおほすたゝかくなんことそきたるさまに世人はあさくみ
るへきをさはいへと心えてものせらるゝにされはよとなむいとゝおもひなられ
侍大将はおほやかたはやうくゝをとなふめれとかうやうになさけひたるかた
はもとよりしまぬにやあらむかの院なにも心をやよひ給はぬことはおさくゝ
なきうちにもかくのかたのことは御心とゝめていとかしくしりとゝのへ給へ
るをさこそおほしすてたるやうなれしつかにきこしめしすまさむ事いまでもな
む心つかひせらるへきかの大將ともろともにみいれてまひのわらはへのようい
心はへよくゝはへ給へものゝしなといふ物はたゝわかたてたることこそあれい
とくちおしき物なりなといとなつかしくのたまひつくるをうれしきものからく
るしくつゝましくてことすくなにてこの御まへをとくたちなむとおもへはれい
のやうにこまやかにあらてやうくゝすへりいてぬひむかしのおとゝにて大将
のつくろひいたし給かく人まひ人のさうそくのことなとまたくゝをこなひくは

へ給あるへきかきりいみしくつくし給へるにいと、くはしき心しらひそふもけにこのみちはいとふかき人にそのし給めるけふはかゝるこゝろみのひなれと御方く物みたまはむにみところなくはあらせしとてかの御賀のひはあかきらつるはみにえひそめのしたかさねをきるへしけふはあをいろにすわうかさねかく人三十人けふはしらかさねをきたるたつみのかたのつりとのにつゝきたるらうをかく所にて山のみなみのそはより御前にいつるほと仙遊霞といふものあそひて雪のたゝいさゝかちるに春のとなりちかくむめのけしきみるかひありてほゝゑみたりひさしのみすのうちにおはしませは式部卿のみや右のおとゝはかりさふらひたまひてそれよりしものかむたちめはすのこにわざとならぬひの事にて御あるしなとけちかきほとにつかうまつりなしたり右の大とのゝ四らう君大將殿の三らう君兵部卿のみやのそむわうの君たちふたりは万歳樂またいとちひさきほとにていとらうたけ也四人なからいつれとなくたかきいへのこにてかたちおかしけにかしつきいてたる思ひなしもやむことなし又大將の御子のないしのすけはらの二らう君式部卿の宮の兵衛督といひしいまは源中納言の御こわう上右のおほるとのゝ三らう君れうわう大將殿のたらうらくそむさては太平樂喜春樂などいふまひともをなんおなし御ながらひの君たちおとなたちなどまひけるくれゆけはみすあけさせ給てものゝけうまさるにいとうつくしき御むまこの君たちのかたちすかたにてまひのさまも世にみえぬ手をつくしておほむ師ともゝをのくゝてのかきりをゝしへきこえけるにふかきかとくゝしさをくはへてめつらかにまひ給をいつれをもいとらうたしとおほすおい給へるかむたちめたちはみな涙おとし給式部卿の宮も御まこをおほして御はなの色つくまでしほたれ給あるしの院するよはひにそへてはゑひなきこそとゝめかたきわさなりけれ衛門督心とゝめてほゝゑまるゝいと心はつかしやさりともいましはしならんさかさまにゆかぬとし月よおいはえのかれぬわさ也とてうちみやり給に人よりけにまめたちくんしてまことに心ちもいとなやましなければいみしきこともめもとまらぬ心ちする人をしもさしわきてそらゑひをしつゝかくのたまふたはふれのやうなれといとゝむねつふれてさかつきのめくりくるもかしらいたくおほゆれはけしき許にてまきはすを御覽しとかめてもたせなからたひくゝし給へははしたなくともてわつらふさまなへての人にゝすおかし心地かきみたりてたへかたければまたこともはてぬにまかて給ぬるまゝにいといたくまとひてれいのいとおとろくゝしきゑひにもあらぬをいかなれはかゝるならむつゝましと物を思ひつるに氣ののほりぬるにやいとさいふばかりおくすへき心よはさとはお

ほえぬをいふかひなくもありけるかなと身つから思ひしらるしはしのゑひのま
とひにもあらさりけりやかていといたくわつらひ給おと、は、北の方おほし
はきてよそくにていとおほつかなしとてとのにわたしたてまつり給を女宮の
おほしたるさままたいと心くるしことなくてすくすへきひ比は心のとかにあ
なたのみしていとしもあらぬ御こ、ろさしなれといまはとわかれたてまつるへ
きかとてにやとおもふはあはれにかなしくをくれておほしなけかんことのかた
しけなきをいみしと思ふは、みやす所もいといみしうなけき給て世のこと、し
ておやをは猶さる物にをきたてまつりてかゝる御なからひはとあるおりもかゝ
るおりもはなれたまはぬこそれいのことなれかくひきわかれてたひらかにもの
したまふまでもすくし給はむか心つくしなるへきことをしはしこゝにてかくて
こゝろみたまへと御かたはらに御きちやうはかりをへたて、みたてまつり給こ
とはりやかすならぬ身にてをよひかたき御なからひになましひにゆるされたて
まつりてさふらふしるしにはなく世に侍りてかひなき身のほともすこしひと
ゝひとしくなるけちめをもや御覽せらるゝとこそおもふ給つれいといみしくか
くさへなり侍へれはふかき心さしをたに御覽しはてられすやなり侍りなむとお
もふたまふるになんとまりかたき心地にもえゆきやるましく思給へらるゝなど
かたみになき給ひてとみにもえわたり給はねは又は、きたのかたうしろめたく
おほしてなとかまつみえむとはおもひたまふましきわれは心ちもすこしれいな
らす心ほそき時はあまたの中にまつとりわきてゆかしくもたのしくもこそお
ほえ給へかくいとおほつかなきことゝうらみきこえ給も又いとことほりなり人
よりさきなりけるけちめにやとりわきておもひならひたるをいまになをかなし
くし給ひてしはしもみえぬをはくるしき物にし給へは心ちのかくかきりにおほ
ゆるおりしもみえたてまつらさらむつみふかくいふせかるへしいまはとたのみ
なくきかせ給は、いとしのひてわたり給ひて御覽せよかならず又たいめんたま
はらむあやしうたゆくをろかなる本上にてことにふれてをろかにおほさるゝこ
ともありつらむこそくやしう侍れかゝるいのちのほとをしらてゆくすゑなかく
のみおもひ侍けることゝなくゝわたりたまひぬ宮はとまり給ていふかたなく
おほしこかれたり大殿にまちうけきこえ給てよろつにさはき給さるはたちまち
におとろおとろしき御心ちのさまにもあらず月ころものなとをさらにまいらさ
りけるにいとゝはかなきかうしなとをたにふれたまはすたゝやうゝものにひ
きいるゝやうにみえ給さる時のいうそくのかく物したまへは世中おしみあたら
しかりて御とふらひにまいり給はぬ人なし内よりも院よりも御とふらひしは

くきこえつ、いみしくおしおほしめしたるにもいと、しきおやたちの御心
のみまとふ六条院にもいとくちおしきわさなりとおほしおとろきて御とふらひ
にたひくねんころにち、おと、にもきこえ給大將はましていとよき御中なれ
はけちかくものし給つ、いみしくなけきありき給御賀は廿五日になりにけりか
ゝる時のやむことなきかむたちめのおもくわつらひたまふにおやはらからあま
たの人ゝさるたかき御なからひのなけきしほれ給へるころをひにてもものすさま
しきやうなれとつきくにと、こほりつる事たにあるをさてやむましき事なれ
はいかてかはおほしと、まらむ女宮の御心の内をそいとおしく思ひきこえさせ
給れいの五十寺の御す経又かのおはします御てらにもまかひるさなの